

御先祖様は子孫の為に  
生きる

鈴ノ木

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

明治時代。動乱の時代にかつて日本を根底から変えようと、日々尽力を尽くしていた弁論者が居た。

しかし、彼の夢は病により崩れてしまった。何とかして生きたい。その執念が彼を現代へと転生させてしまった。そして彼は自らの子孫と出会い、仲間と共に頂点を目指す!!

※原作沿いではありませんが、少し飛ばしている所もあるのでご注意ください。  
文才は無いので悪しからず。

# 目次

御先祖様は子孫の為に動く	1
御先祖様は決意する	9
御先祖様は仲間と出会う	21
御先祖様は対峙する	30
御先祖様は体を張る	45
御先祖様は再会する	55
御先祖様は考える	64
御先祖様は知る	83
御先祖様は心配する	99
御先祖様は空気を読めなかった	110
御先祖様は試験を受ける	132



# 御先祖様は子孫の為に動く

「散歩に行つてくる」

「お気を付けて行つてらっしゃいませ。晩御飯迄にはお戻り下さいね？」

「嗚呼、分かつた」

住宅街のとある一軒家から、一人の少女が駆け足で家を出た。ポニーテールに結んだ黄色の細いリボンを靡かせ、全速力で住宅街を走り抜ける。その表情は喜びの表情の反面、複雑そうな表情を見せた。

「遂に……遂に！稲妻町へと戻つてきたぞー！」

可愛らしい顔立ちからは想像出来ない、古風な言葉を発しながら少女は走り続ける。彼女の名前は入野明。うら若き中学二年生である。しかし、それは少女「入野明」としての名前だ。彼女には前世の記憶がある。明治時代、動乱の時代を生きたうら若き青年であつた。心の底から日本を変えたいと決意し、日々仲間と共にあちらこちらを駆け巡つた青年であつた。しかし、彼はその途中に結核を患いこの世を去つた。その時の無念が残り、現世にて「入野明」として生まれ変わってしまった。彼はその点についてはどうでも良かった。気になっていたのは、仲間と結婚したばかりの妻と息子の事について

てだった。仲間の事は、教科書には載っていないが、文献を漁ってみるとかつての仲間の名が記されていたので、自分の跡を継いで日本を変えてくれたのだと感心していた。

(問題は、妻子の事だ……家の者達には無碍に扱うなどは再三言っておいたから路頭に迷う事はなからう。子孫がこの稲妻町に居てくれればな……)

駆け足で住宅街を抜け暫く走り続けていると、広い河川敷に出た。かつてはここで毎日仲間と議論を交わしていたものだと感慨深く思っていると、遠くの方から子どもたちの声が聴こえてきた。何やら黒と白のボールを蹴って転がしているようだ。

(確かサッカー、とやらだったかな? 現代の言葉には中々馴れないものだ)

現代に生まれ変わり一番苦労したのが、外来語や英語だった。前世の頃から英訳等は友人に頼む程に苦手だった。なので現代においても英語のテストや授業には苦労していた。

(……昔も今も、子どもはあれ位元気な方が良いもんだ)

「まこー! 竜介の時のカット! いい動きだったな!」

(なっ!?)

その場を去ろうとした入野の耳に聞き慣れた声が聴こえてきた。前世の小さい頃の自分の声とそっくりだった。まさかと思ひ、坂を滑るようにして下り、ギリギリ声の主

が見える所まで近づいた。そして入野は目を見開いた。そこに居た少年はまさしく前世の自分の生き写しの様に見えた。入野は確信した。この少年は、自分の子孫なのだと。少年は自分よりも小さい子ども達とサッカーを楽しんでいた。

(彼が……俺の子孫なのか。そうか、生きていてくれたのか。会えたのなら、良いか)

入野は後ろに振り返り歩き始めた。元々入野は子孫と関わるつもりは無かった。例え自分が祖先だと言つても、今の自分は「入野明」なのだ。信じて貰える訳が無い。

(幸せに生きてくれよ……俺の子孫よ)

「誰だあ!? こいつ蹴ったのは!？」

「だ、大丈夫ですか? すみません……」

怒鳴り声が聴こえてきたので振り返つて見ると、背の高い男に少年が頭を下げている。どうやら、ボールが当たってしまったらしい。すると隣に居た背の低い男が少年の腹に足蹴りをした。これには周りにいた子どもたちや入野も驚いていた。

(きちんと頭を下げた謝っていたでは無いか!?)

一瞬で身体中の血が怒りで沸騰しそうな感覚がした。男2人が何かを話しているよ。うだが、どうにも少年達を馬鹿にしていると思えない。入野は気付けば彼らの元に走り出していた。

「おい貴様ら!! いい加減にしろ!!」

彼らの近くにまで近づいた入野は声を張り上げて男達に牽制を掛けた。突然の声にその場に居た誰もが驚いたが、入野は気にせずに続ける。

「彼はきちんと謝ったのでは無いか？それを侮辱するとはどういう了見だ!! 貴様らは彼等よりも歳上なのだろう？ならば、歳上として正しい行動を取るのが普通だろうが!!」

周りの少年達が驚いていたが、二人の男は暫くしてニヤニヤと笑い出した。

「言葉遣いは気に食わねえが、なかなか可愛い顔してんじゃん。俺らと遊ばね?」

「断る!! 暇そうな貴様らとは違ってな、貴様らの様な奴と遊ぶ程此方は暇では無い」  
「なっ……」

背の高い男が呆気に取られていると、背の低い男がけしかけるように言う。

「安井さん、お手本見せてやったらどうですかい?」

「お、いいねえ」

安井と呼ばれた男は足元のボールに唾を吐き、そのまま思いつきりボールを蹴り上げた。ボールは勢い良く飛んでいった。素人とは言え、体格の良い男が繰り出すボールの威力はそれなりにあった。ボールは近くに居た少女に向かっていった。

「危ない!!」

少女の元に向かおうとした瞬間、何処かから別の少年が飛び出して来た。少年は背の高い男目掛けてボールを蹴り返した。ボールは見事に顔面に当たり、跳ね返ったボー



ルは勢いが衰える事なく入野へと向かっていた。

「よけて!!」

「ふんっ!!」

入野は咄嗟に右脚を高く上げ背の低い男目掛けてボールを蹴り返した。背の低い男が、見事に吹っ飛んだ。少年達は啞然としており、背の低い男はゆつくりと立ち上がり睨みつけた。

「て、テメエら……」

「ふん、自業自得だな」

「こ、この女ア!!」

背の低い男が入野に殴り掛かろうと拳を振り上げた。入野は受け止めようと手を伸ばす。その手に別の手が重なる。

「その拳を降ろせ」

「ひ、お、覚えてろよー!!」

ボールを蹴り返した少年の殺気に怯んだ背の低い男は、少年の手を振り払い背の高い男を連れて一目散に逃げ出していった。入野は少年の方に向き直った。

「ありがとうな」

「ああ……」

少年が小さく頷くとその場から歩き出した。すると子孫らしき少年が呼び止めて来た。少年は振り返らず、入野だけ振り返った。ボールを持ち、キラキラした目で見ていた。

「お前らのキックすげーな!! サッカーやってんのか!？」

サッカーという言葉に少年の足が止まった。

「なあ!! 何処の学校なんだ? 良かったら一緒に練習しないか?」

しかし少年は彼等の方を向く事無く再び歩き始めてしまった。入野はゆっくりと後ろに下がり始めた。彼が去ったのなら次に来るのは自分だ。

(……悪いが、子孫に関わるつもりは無いんで……せめてなら、我が子に会ってみたかったのだがな)

そのままぐるりと後ろを向きそのまま全速力でその場を後にした。彼等の呼び止める声を聴こえないかのように無視しながら。

次の日の朝、入野は学校に行く準備を進めていた。入野は前世の記憶があるという事もあり、周りの同年代の子に比べて精神年齢が一回り近くも高い。その為、話が噛み合

わず実質コミュ障のぼっちという扱いになってしまった。

（両親の仕事の都合で此処に引越しをすると聞いた時は、稲妻町に来れるから良しと思つたが、よくよく考えてみると全く新しい環境でやっていけるのだろうか……）

溜め息が止まらない入野はふと思ひ立ち、部屋の隅に立て掛けて置いた竹刀に手を伸ばす。なかなかの重量があり、持つとズシンとした重みを感じる。前世の頃はこの重さでも軽々と素振り千回はいけたのだが、現代では五百が良い所である。しかも、既に朝の内に素振りは終えている。これ以上振れば筋肉痛になる事間違いないであろう。

（心が落ち着かない時はこれを振るえば良いのだが……女子の身体というのは不便な事が多い。この程度の重さが限界とは、自分でも情けない）

再び溜め息を吐いているとドアをノックする音がした。そしてゆっくりとドアが開かれる。

「明さん、もうそろそろ出発のお時間ですよ」

「嗚呼、分かった。では、行ってくる」

「お気を付けて。今晚はカレーに致しますね」

「松江さん、夕飯にはまだ早いと思うが……」

オホホと上品に笑う家政婦、松江に見送られ外に出る。

「行くの嫌だな……」

「珍しいですね。明さんが弱音を吐くなんて」

「松江さんも、前の学校で私がどうだったか知っているか？こんなんじやまたコミュ障だのぼっちだの言われるのだろうな……嫌ではないが、心がどうも煩わしく感じるのだ」

「そう……でしたね。では、こうしませんか？最初に話した方とお友達になるといのは」

「本気で言ってるのか？」

「ええ……私もそうやって友達を作ったものです」

「……善処しよう」

そう言い、入野は歩き始めた。真新しい制服にはどうも馴れない。チラホラと登校する生徒が見える。入野には気付いて居ないようだが、どうも居心地が悪い。

（慣れない事ばかりだな）

そう思いながら、重い足を引き摺る様に歩き始めた。

（……帰りたい）

前世で休みたい休みたいとばかり言っていた友人の気持ちが分かるような気がした。

## 御先祖様は決意する

「此処が理事長室……か」

学校に到着した入野は生徒に会わない様に様子を窺いながら理事長室前までやってきた。深呼吸をした入野は二三回ノックをする。どうぞと少女の声が聴こえたのでゆつくりとドアを開ける。中に居たのは自分とほぼ変わらない位の少女だった。制服を着てるといふ事は、此処の生徒らしい。

「あら、初めまして。私は理事長代理の雷門夏未、二年生よ。よろしくね?」

「あ、い、入野明です……宜しくお願ひ致します」

「そんなに緊張しなくて良いわよ。もうそろそろ貴女の担任になる先生がいらつしやるわ。そこに座つて待つて貰えるかしら?」

「あ、はい」

入野は近くのソファアールへと腰掛けた。そしてゆつくりと息を吐いた。

(……本物のお嬢様だ)

自分も一応それなりに裕福であり、幼い頃から礼儀作法はきちんとしているのだが、彼女は動作の一つ一つが優雅だった。感心以外の何物でも無い。すると夏未がこちら

を振り向いた。

「あら、何かしら?」

「え? いえ、何でも……」

「そう……あら、先生がいらつしやったわ」

ドアをノックし入って来たのは真面目そうなスーツを着た男だった。

「失礼致します、お嬢様」

「先生、彼女が貴方のクラスに入る転入生です。案内をお願いします」

「はい、分かりました。貴女が入野さんですね? 担任の山下です。では、教室に向かいましょう」

担任に続いて廊下に出ようとした時、入野はクルリと後ろを振り返った。

「あ、あの、雷門さん」

「あら、何かしら?」

「ぜ、是非良ければ、私と友達になってくれませんか?」

「……え?」

「私、前の学校では、余り友達が出来なくて……だから、次の学校では一番初めに話した人と友達になりたいと思って……それが、雷門さんだったから。やましい気持ちとかは全く無い、それは断言出来ます。だ、だから……」

暫く無言の状態が続く。自分でも分かるほどに身体が熱くなっている。きつと顔は真つ赤なのだろうか。前世では口先八町で相手を丸め込んでいた自分が、友達一人作るのにここまで戸惑うとは、情けないと心中で自嘲した。すると夏未はボソリと呟いた。

「……敬語」

「……え？」

「と、友達になるなら、敬語は使わないのが常識でしょう？」

一瞬何の事を言ってるのか分からなかったが、直ぐに理解した入野は力強く頷いた。「た、たまには理事長室にいらっしやい。転校したばかりで分からない事も多いだろうから、色々と教えてあげるわ」

よく見れば、夏未も顔を真つ赤にしていた。口調もさつきより強めだが、照れているのが丸分かりである。

「あ、ありがとう！な、なつ……夏、未」

「え、ええ。ほら早く行きなさい。先生を待たせてるわ」

「これからもよろしく頼む」

そう言い、入野はドアを閉め担任の後を着いていった。暫く歩くと教室の前に着いた。そこには昨日、入野達の助けに入った少年も居た。

「じゃあ、俺が呼ぶまで待っていてくれ」

そう言い担任は教室に入ってしまった。残ったのは入野と少年の二人だった。

「あの……」

「何だ」

「……昨日は、本当に有難う御座います……」

「ああ……」

さり気なく話しかけてみるも思っていた以上に冷たい。しかし、今の入野は夏未と友達になった事で自信が付いている。その程度で怯える程、気弱では無い。

「入野明です。どうぞ、宜しくお願い致します」

「……豪炎寺修也だ」

挨拶を返してくれただけでも充分だろう。入野がホツとしていると、今度は豪炎寺の方から話し掛けてきた。

「……昨日とは随分性格が違うな」

「え？あ、ああ……あれを見てたらついカツとなってしまう……というより、普段からあんな感じで口調も結構厳しくて……なのでここでは余り口調が厳しくならない様になって思ってた」

「そのままでも良いんじゃないのか」

「えっ？」



聞き返そうとしたが、担任に呼ばれた為仕方無く後で聞こうと教室に入った。  
「あー……!!!」

突然の大声に全員がびっくりし、声の主の方を向く。入野もその方を見ると目を見開いた。叫び声を挙げたのは、昨日の子孫らしき少年だった。少年は驚きながらも、嬉しそうに入野と豪炎寺を指差して笑っていた。

「何だ円堂、知り合いか？」

「いや、知り合いつて訳じゃ無いんですけど……」

「じゃあ、良いから座れ」

「は、はい」

円堂と呼ばれた少年は席に座りながらもガッツポーズを決めていた。しかし入野にはそんな事など関係無かった。

(円堂……円堂!?)

因みに入野明の前世の苗字は円堂である。円堂という苗字は全国的に見てもとても少ない。そしてその円堂がこの雷門町に暮らしている。

(確信した。彼奴が俺の子孫だ)

目の前が真っ暗になる感覚がした。関わるつもりは無い筈だったのだが、これで子孫と関わらないという選択肢は消え去った。

(神よ!!俺が何をしたというんだ!!)

普段神など全く信仰していないのだが、この時ばかりは神にも縋りたい気持ちだった。その後、どんよりとした気持ちになりながら自己紹介を終えた入野は、担任に指定された机へと向かった。丁度一番窓側の席だった。

(あ、ここなら現実逃避できる)

「よろしくな、俺は風丸一郎太だ」

「えっ、あつ。ど、どうも宜しくお願ひ致します」

「そんなに緊張するなよ。確かこつちで使う教科書、揃って無いんだっけ?一緒に見ようぜ」

「あ、有難う御座います……」

隣の席の風丸の方に机を寄せ一緒に授業を受ける事になってしまい、内心焦ったりもしたが何事も無く時間が過ぎていった。そしてお昼休みになり、入野は質問責めを続けるクラスメイトを交わしてトイレに入り、教室に戻ろうとした。

「……サツカーはもう辞めたんだ」

ふと、豪炎寺の声が聞こえてきたので、こつそり教室に入り聞き耳を立てる。側には円堂とクラスメイトが立っていた。

「辞めたって、どうして……」

「俺に構うな」

淡々と話す豪炎寺に円堂は肩を落としてしまった。すると、クラスメイトの女子生徒が入野の方に気付いた。

「あれ？入野さん？」

「何?」

円堂がバツと入野の方に振り返った。さっきのあの残念そうな表情はどうしたのかと内心考えてしまった。

「入野!!お前もサッカー部に入らないか!」

「え?えつと……」

「あ、自己紹介がまだだったな!俺、円堂守。サッカー部のキャプテンやってんだ!!ポジシヨンはキーパー!よろしくな!」

「こ、此方こそ宜しくお願い致します」

(自己紹介も何も、俺はお前の御先祖様なんだが……)

入野がそう思っている、円堂達がそれを知ることとは無い。

「昨日のキック凄かったな!!コントロールも良かったし、力強いシュートだったぜ!!」

「そ、それはどうも……」

「円堂!!」

円堂が構わず話し掛けようとすると、教室に一人の男子生徒が飛び込んで来た。少々息切れしている様で、息が若干荒い。

「冬海先生がお前を呼んでいる。校長室に來いってさ」

「校長室？」

「大事な話があるらしい……俺、嫌な予感がするんだ。例えば、廃部についてとか」

「廃部!？」

廃部の話に驚く円堂達。入野は、少し肩を揺らした豪炎寺を見逃さなかった。

「私もそんな噂聞いてたけど……」

「じよ、冗談じゃないぞ。廃部になんかさせるもんか!!」

そう言い残し、円堂は怒りながら教室を飛び出して行ってしまった。

「廃部……?？」

「木野、この子は？」

ふと男子生徒が入野の方に気が付いた。木野と呼ばれた女子生徒はハツとなって入野と男子生徒の間に入る。

「今日からこのクラスに転入してきた入野明さんよ」

「入野明です。宜しくお願ひ致します」

「あ、どうも。俺は隣のクラスの半田真一。サッカー部に入ってるんだ。よろしくな」

「はい、此方こそ」

「……思っただけ、入野っていつも敬語使ってるのか？」

「は、はい」

秋と半田は不思議そうな表情をしていた。同級生に敬語を使う方が珍しいのだろう。

「元々、口調がキツイ方なので。そのせいで前の学校では仲の良い人が居なかったので、敬語にしておこうかと……」

「んー、そこまで気にしなくても良いと思うよ。俺は素のままが一番良いと思うし、ずっと敬語だと苦しいだろ？」

「普通に話してた方が気が楽になるよー」

秋と半田に諭され、頬が緩むのが自分でも分かる。

「……二人共、有難う」

「これからもよろしくな」

「私、木野秋っていうの。名前で呼んでね？」

「宜しく、秋」

「昨日河川敷で、助けに入ってくれてありがとう！あの時のシュートかつこよかったよ！！」

「河川敷？何かあったのか？」

「実はね……」

秋が昨日の事を半田に話すと、半田は驚いた顔をして入野の方を向いた。

「……意外と激情家だったり？」

「かも知れない。あの時は、自分でもカツとなつてな……」

「すげえな」

半田の感心の言葉に入野は苦笑い交じりに頬を搔いた。

それから放課後になり、やる事が無い入野はグラウンドの端の木の下に座り込んだ。一人でいるには最適な場所だ。

（これからどうしていこうか……子孫の部活の手助けをするのも有りなのかもしれないが、俺は子孫とは関わる気は無いからな……）

「……い……」

（とはいえ、ああも目を付けられてしまえば関わる事は必須になるだろう……）

「お……りの……」

(一体どうしたものか……)

「おーい、入野！」

「ん？」

顔を上げるとそこには円堂が看板を担いで立っていた。看板には『帝国学園来たる！サッカー部員大募集!!』と書かれていた。

「円堂。それは部員募集の看板か？」

「おう！入野もサッカー部に入るか!?他の奴らにも聞かなくちゃ！行くぞ、入野!!」

「は？私は一言も行くとはって腕を引っ張るな!!」

円堂に腕を引かれ、無理矢理立ち上がらせられた入野は円堂と共に学校中を駆け巡るハメになってしまった。入野は何度か止めようもしたが聞く耳を持たず、何時しか止めるのを諦め大人しく付いていくことにした。学校中を駆け回り、あつという間に時間が過ぎていった。

(……可笑しい。話では現代ではサッカーは人気のスポーツだと聞いていたのだが。此の学校はそうでは無いようだ)

すると突然円堂が歩みを止め、入野の方に振り向いた。その表情はとても寂しそうに見えた。

「ごめんな、入野」

その言葉に入野の良心がズキリと傷む様な感覚がした。

(……何を考えていたんだ俺は……俺は間違っていた。困っている子孫を助けずして、何が御先祖様だ)

そして入野は円堂の手を力強く握った。

「円堂、私にはサッカーの経験などまるで無い。だが、円堂を助けたいという気持ちはある。だからお前の夢を手伝わせて欲しい」

「それって……」

「サッカー部に入部しよう」

「……ありがとう!!入野!!」

円堂は目を耀かせて入野の手を握り返しブンブンと振り回した。その表情を見た入野は内心ホツとしていた。

(そうだ、俺は子孫の此の笑顔が見たかったのだ。子孫の為になら、俺は何だってやる。これは自分の子供に何も出来なかったせめてもの償いだ)



## 御先祖様は仲間と出会う

入部届けを出した頃にはすっかり夕方になってしまった。入野は円堂に連れて行きたい場所があるとまた腕を引かれていた。

「何処に向かうんだ？昨日練習していた河川敷とは方向が違うぞ」

「良いから良いから！」

長い道のりを超え階段を登った先、入野の目に広がってきたのは広大な景色と橙色の夕陽だった。前世と同じ夕陽が入野の目に映った。

「此処は……」

「俺の小さい頃からのお気に入り場所なんだ。入野にどうしても見せたいって思ってた」

「嗚呼……綺麗だ」

（今も昔も、この場所の美しさは変わらないのだな。やはりお前は俺の子孫だな。好きな場所まで一緒になるとは）

景色を眺めていると、視界の端に見覚えのある人影があった。円堂もそれに気付き、人影へと近づいた。

「豪炎寺!!」

豪炎寺は円堂達の方を向き驚いた表情を見せたが、直ぐに何時もの固い表情へと戻りその場を去ろうとした。しかし円堂が先回りをし豪炎寺の前に立ちはだかった。

「ここ、スッゲー良い所だろ!!俺のちっちゃい頃からのお気に入りなんだ!!なあ、お前も聞いているだろ?帝国学園との練習試合」

その言葉に豪炎寺が一瞬目を見開いたのを入野は見逃さなかった。

「でも、メンバーがどうしても足りなくてさ。入野と一緒に学校中回ったんだけど、誰も入ってくれなくて……なあ、考え直してくれないか?」

豪炎寺は何も答えず夕陽を見つめていた。

「どうして、辞めちゃったんだ?良かったら話してくれないか?勿体ないじゃないか!あのキック!!最初にお前を見た時、俺鳥肌立ったんだぜ。辞めたのは理由があるんだろうけど、サッカーが嫌いになった、じゃないよな。好きでなきや、あんなキック出来ないもんない!!」

「……お前、良く喋るな」

(もう、止めた方が良い。これ以上しつこく誘えば、二度と勧誘する事は出来ない)

「円堂、今日はもう諦め……」

「俺、お前と入野とサッカーやりたいんだよ。俺達三人が組んだら最強のチームが出来

るぞ!!」

「円堂!!」

「もう俺に話し掛けるな」

それだけ言うと、豪炎寺は下の道路へと飛び降りた。入野と円堂もつられて下を見る。豪炎寺は綺麗に着地し、歩き始めた。

「じゃあ!何で昨日ボールを蹴った!?!」

「しつこいんだよ、お前は」

こちらを見ながらボソリと呟き、豪炎寺は去っていった。円堂は肩を落としてしまった。

(もっと早くに止めるべきだったか……)

円堂は残念そうな顔を浮かべていたが、夕陽を見つめると、よしと声を上げて近くに縄でぶら下がったタイヤへと向かった。心を切り替えるかと入野もそれに続く。

「特訓、始めるか!」

「嗚呼、宜しく頼む」

それから入野は円堂からサッカーのルールについて簡単に教えて貰い、早速特訓を始めた。

辺りがすっかり暗くなり、街灯の灯りだけが頼りになって来る頃、二人はまだ特訓を続けていた。入野はシュートの練習として、木に何度もシュートのイメージをしながらボールを高く上げ勢い良くジャンプしシュートを撃ち続けていた。

「うおおおおお!!」

何度目かも分からないシュートを撃った時、ボールの周りがバチバチと火花を散らしながら木にめり込む。木はさつきよりも大きく揺れ動いた。今までとは違う威力のシュートに入野は驚きを隠せなかった。

「い、今のは……?」

「ぐわあっ!!」

「円堂!?!」

呆気にとられていると、円堂の叫び声が聞こえていた。顔を円堂の方に向けると、円堂は擦り傷まみれで地面に突っ伏していた。入野は慌てて駆け寄る。

「大丈夫か!?!少し休もう、立てるか?」

「何とか……」

「無茶苦茶だな、その特訓」

突然の第三者の声に二人は驚き、顔を向ける。そこに居たのは、風丸だった。風丸は二人の傍に近づき円堂を立たせた。円堂は何とか立ち上がり、近くのベンチに腰を下ろした。

「それにしても、何で入野も一緒にやってるんだ？」

「サッカー部に入部する事になつてな」

「そうだったのか!？」

「意外そうにでも見えたか？」

「まあな。それにしても、どうしてもこんな特訓を？」

「ああ、あれだよ」

円堂の指差す先には一冊のノートがあった。少し年季の入ったノートを手に取り、ページを捲る。すると顔を引き攣らせながらボソリと「読めない」と呟いた。

（まあそれが普通の反応だな）

ノートには文字というより暗号の様な文章の羅列が並んでいた。絵が載っているお陰で辛うじてサッカーの事について書かれている事が分かる。

「お前ら、これ読めたのか？」

「まあな……読むというより解説と言った方が正しいのかもしれないがな」

入野は苦笑しながら、ノートを覗き見る。

（可笑しい。俺はまだ字は読める程度には綺麗だった筈。何処で下手くそになったのだ、俺の子孫達は）

「それ書いたの、じいちゃんなんだよね」

「じいちゃん？」

「ああ。俺が生まれる前に死んじゃったんだけどね。昔、雷門サッカー部の監督だったんだってさ。そんな時に作ったノートらしい。帝国学園はパワーもスピードも想像以上さ。そいつらのシュートを止めるにはじいちゃんの技をマスターするしかないと思っ  
てさ」

「入野もか？」

「嗚呼、此奴の夢を手伝うと言ったんだ。ならば出来る限りの事はしたくてな。勝てないと最初から分かっていたとしても、逃げるつもりはない」

「……お前ら、本気で帝国学園に勝つ気なんだな」

「嗚呼」

「もちろんだ!!」

入野と円堂は迷い無く答える。するとフツと笑った風丸が手を差し出した。その意

味が分からなかった円堂は手と風丸を交互に見た。

「お前らのその気合い乗った!!」

「風丸!!」

円堂は目を耀かせて風丸の手を力強く握り締めた。入野も嬉しそうに二人を見つめていた。

「……俺はやるぜ。お前らはどうするんだ?」

風丸が背後に向かって問い掛けると、木の陰や茂みから半田達サッカー部員が出て来た。

「みんな!!」

円堂は部員達の元に走り出そうとしたが、足を取られ転んでしまった。部員達が円堂の元に駆け寄る。

「キャプテン!!」

円堂の周りに部員達が集まるのを見て、入野は円堂にかつての自分を重ねていた。(此奴には仲間が居る……だが俺には、その仲間はもう居ない。寂しいもんだな)

「入野、入野。どうかしたのか?」

「ん? 否、何でもない」

風丸が心配そうに顔を覗き込んで居たが、入野はフツと微笑み円堂達の方へと向き直

る。すると、一人の部員と目が合った。

「そう言えばキャプテン。この人は……」

「ん？ああ、俺のクラスに転校してきた入野明だ。今日からサッカー部に入部するんだ

！」

「宜しくお願ひ致します」

「入部ってマネージャーでヤンスか？」

「いや、選手だ」

「ええええええええ!!」

円堂の言葉に風丸と円堂以外の部員達が驚いた顔で見入野を見る。どうやら、円堂の特訓に付き合わされていただけだと思われる。半田が慌てて入野の両肩を掴む。

「お前、本気で入部する気なのか!？」

「嗚呼。円堂とも約束しているからな。それに困っている奴は放って置けない性分なんだ」

「そう……なのか」

「何だ？文句でもあるのか？」

「そ、それはないよ」



「ならば、それでよし。ところで、だ。折角なら自己紹介をして貰えないか？名前も知らぬ人間とサツカーをするのは、ちと至難の業なんだが」

「ああ、そうだな」

その後部員達の自己紹介を終え、円堂達は再び特訓を再開させた。今度は二人ではなく皆で。

（仲間……か。現代でも良き仲間が見つかりそうだ。有難う、子孫よ）

## 御先祖様は対峙する

試合当日、部員達は部室に集まっていた。

「皆、紹介するよ。今日の試合、助っ人に入ってくれる松野空介だ」

「僕の事はマックスって呼んでいいよ。君達のキャプテンを見てたら、なんだが退屈しなさそうだなって思ってた」

彼は確か、部員勧誘で学校中を駆け回っていた時に入野達を見ていた生徒だった。その様子に風丸達が溜め息を吐いた。一人の部員、染岡竜吾がじろりと睨む。

「退屈って、遊びじゃねえんだぞ。試合は」

「心配いらないよ。サッカーはやった事無いけど、こう見えて器用なんだよね」

「と、いう事だ。期待しようぜ」

すると松野と入野の目が合った。松野は入野の前に歩いて来て手を差し出した。

「君が入野さんだね？同じクラスの中途半田から話は聞いているよ」

「誰が中途半田だ!!」

「よろしくね」

「あ、嗚呼。此方こそ、今日は宜しく頼む」

松野はニツコリと笑い、入野の手を握った。半田がふと思い出したかのように呟いた。

「これで部員は全員なのか？」

「俺が居る……」

「ひっ!？」

半田の背後には何時から居たのか、髪の高い生徒影野仁が居た。

「ごめん、気付かなくて……」

「影野も入部したんだっけか」

「良いのさ。俺はもつと存在感を出せる男になりたいくて来たんだからね……フッフ」

影野の不気味な笑い声に何人かが苦笑してしまった。それからグラウンドに出て帝国学園を待っていると、さつきまで晴れていた空がどんよりと重く曇り始めた。遠くから細長い旗を靡かせた黒いバスが入って来た。バスが停まり、ドアが開くとレッドカーペットが綺麗に敷かれ、中から沢山の生徒が出てきてカーペットの横に並び両脇に挟んでいたボールを足で押さえて構える。すると、威圧感のあるサッカーのユニフォームを着た生徒達が出て来た。

(まるで軍隊の様だな……前世の頃の軍隊もあんな感じだったかな?そして……)

入野はバスの上の椅子に腰掛けている一人の男を見上げた。

(……あれが監督とやらか。何でバスの上に椅子があるのかはこの際置いておこう)

「雷門中サッカー部のキャプテン、円堂守です。練習試合の申し込みありがとうございます」

円堂は一人の生徒に挨拶し手を差し出すも、その生徒は無視をした。

「初めてのグラウンドなんで、ウォーミングアップしても良いかな？」

(何だ……感じの悪い奴だ)

入野はげんなりとした表情で帝国学園のサッカー部を見ていた。円堂を無視した生徒と目が合う。口角を上げて仁王立ちをしており、馬鹿にしている感が否めない。

「女がサッカーやってんのか」

「流石弱小チームって言った所ですな」

「それ程までに切羽詰まってたんだらう」

「どうせ大した事無いんだろ？」

生徒達が入野を見て愉快そうに笑う。何か言われるだろうと予測はしていたが、こうも露骨に言われるのは腹が立ってしようがなかった。

「あ、あいつら!!」

「半田、好きに言わせておけ」

「入野!」

「……餓鬼共の戯言に付き合う程、年齢は低く無いもんでな」

「……お前も同年代だろ」

入野はギリりと帝国学園の生徒達を睨んだ。その視線に生徒達が口を噤んだ。緊迫した雰囲気か辺りを包む。円堂達はベンチに戻り、帝国学園のウォーミングアップを観察する事にした。

「な、何だ……あれ……」

（……想像以上だ）

帝国学園の力は自分達が思っていた以上に高いと、部員達から焦りの声が聴こえてくる。

（嫌味な連中だ。試合が始まる前に戦意を落とそうという訳か。だが、子孫は違うらしい）

円堂だけが、他の部員と同じ様に驚いてはいたが目は興奮の色を見せていた。そしてそれは入野も同じだった。他の部員に悟られない様に平常を気取っているも、内心とてもワクワクしていた。

（強敵を前にしてこども興奮していられるのも、本当に俺とそっくりだ。流石俺の子孫）

円堂を見ていると、帝国学園の生徒がシュートを撃ち込んできた。一瞬反応が遅れた入野は円堂に避けろと叫んだが、円堂は手を前に突き出しボールを受け止めた。グロー

ブは摩擦力で少々焦げてしまった様だ。それでも尚、円堂は恐怖で怯えることは無かった。

「燃えてきたああああ!!皆、一週間の成果をあいっらに見せてやろうぜ!!」

「ええええええ!!」

一年の宍戸佐吉と栗松鉄平が驚いた様に声を上げた。帝国学園の実力に圧倒されてしまったのであろう。

「あ、あの、キャプテン……」

「何だ?」

「俺、トイレ行ってくるっス!」

「え、おい!壁山!」

円堂の制止を振り切って同じく一年の壁山塀吾郎がトイレへと一目散に駆け出した。視線を感じた入野は後ろの方をちらりと見る。帝国学園の生徒の何人かがこちらを見ていた。

「どうするんだ?あいつが抜けたら十人しか居ないようだが?後の一人は、いるのかな?」

生徒の視線は自分達では無く、その後ろの木の影に居る豪炎寺に向いていた事に入野は気付いた。殆どの部員が帝国学園の実力に圧倒され落胆していると、円堂達を呼ぶ声

が聴こえてきた。

「木野、どうかしたのか？」

「彼、サッカー部に入ってくれるんだって！」

秋の横には一人の男子生徒が立っていた。入野はその生徒に見覚えがあった。

（確か、武勇伝を作るとか言っていた目金欠流だったかな？）

「彼、確か運動神経は……」

「ああ……」

風丸や染岡の反応を見る限り、運動神経の方は余り宜しくはないらしい。目金は一通り挨拶を終え部員全体を見渡した。

「どうやら僕は最後の一人では無かった様だね。でも入るって言っていましたし。それで入部するにあたって条件があるんだけど」

「条件？」

「僕さあ、10番のユニフォームしか着たくないんだよね」

「ええ……」

目金の言葉に何人かが座り込んで呆れてしまった。

「どうするでヤンスか？」

「枯れ木も山の賑わいって言うしね……」

「それはどういう意味かな?それに……」

目金はチラリと入野のユニフォームを見る。入野のユニフォームには大きく10番と描かれていた。これは部員全員に装着したいとお願ひされ、入野自身も特に拘る必要が無かった為、10番のユニフォームを着ているだけであった。

「何で女子が10番のユニフォームを着てるんですかあ?」

「じゃあ、女子がサッカーやっちゃいけない決まりでもあんのかよ」

「少なくとも入野はお前よりは出来るぞ」

先程の帝国学園の入野を馬鹿にした様な発言でイライラしていた風丸達にとっては火に油を注ぐ行為だった。風丸達が詰め寄る中、円堂が見事にその空気をぶち壊してしまつた。

「よし分かつた!!」

「えええええ!!」

「キャプテン、マジでヤンスカー!!」

「マジだ!!」

「だあっ!!」

円堂の真面目な回答に半田と達がズッコケた。円堂は満面の笑みで入野の肩にポンと手を置いた。



「……と、言う訳だ。入野、脱げ！」

「……阿呆！」

その言葉と共に、入野は右手を振り上げ円堂の頭に拳骨を落とした。鈍い音がグラウンドに響いた。

「全く、どうして子孫はあも真つ直ぐ過ぎるのだ!!せめて向こうで着替えてとか、言う事あるだろうに!!女心が分かつたらん!!まあ俺も分かつたらんのだがな!!」

部室で秋から受け取った予備のユニフォームに着替え終えた入野は、ベンチに戻り目にユニフォームを渡した。円堂は先程の拳骨がまだ痛むのか頭を押さえ蹲っていた。

「円堂君、円堂君！」

ベンチの向こう側から、一人の男が走ってきた。相当慌てているようだ。

（顧問の、冬海先生。だったかな？生徒達の間では評判は良くないと聞いているが……）  
冬海は円堂達に早く試合を始める様にとせっついてた。時折、チラチラと帝国学園の方に視線を向けていたのが気になった。

「あ、はい！分かりました！皆、壁山を探しに行こう」

「円堂、私は帝国学園の方に一言言つてから向かう。結構待たせているからな」

「ああ、頼んだ！」

円堂達と別れ帝国学園の方に歩こうとする入野の前に冬海が立ちはだかった。

「何の御用でしょうか？」

「い、入野さんは早く壁山君を探しに行きなさい！……ここは先生が言っておきますから！」

「……先程からチラチラと視線が気になっていましたが、そういう事でしたか。大丈夫です。一言謝りに行くだけですから御心配なく。それとも、私があつちに向かつて余計な事を喋らないか不安ですか？」

「なっ……」

「私は先生の事は何も言いません。ですが……円堂達に何か起きれば、私は先生を決して許す事は出来ません。それだけは憶えておいて下さい」

それだけ言うとう入野はさっさと歩き始めた。グラウンドの帝国学園の方に向かつて歩くと、何人かが入野に気付き始めた。一番近くに居た選手に話しかける。

「すみません」

「何だ？」

「大変申し訳ございませんが、部員が戻つて来る迄もう暫くお待ち下さい」

深々と頭を下げ、謝罪する入野に、選手達は少し目を見開いた。近くに居た別の選手が尋ねる。

「あの眼鏡を掛けた男が来て十一人になった筈だ。捜す必要は無いと思うが」

「彼はうちの大切な部員です。人数云々の問題ではありません」

「……お前、名前は何だ」

頭を上げて答える入野に選手は問う。

「雷門中二年、入野明です」

「俺は帝国学園二年、鬼道有人だ」

「お互い最善を尽くしましょう。では、失礼致します」

そう言い残し、入野は円堂達が捜す校舎へと走り去った。その後ろ姿を鬼道達は不思議そうな目で見ていた。

「おーい、円堂！居たか？」

「あ、入野！それが何処にも居なくて……」

その後、円堂達と合流した入野は校舎のあちこちを探し回っていた。

「何処に行つちまつたんだ？」

「あいつが行きそうな場所はほとんど見たんだけどなあ……」

半田が首を降り穴戸が肩を落としていると、何処からか悲鳴が聴こえてきた。何事かと慌てて向かつてみると、栗松が教室で四つん這いになりながらガンガンと動いているロッカーを指差していた。

「ロッカーが！さつきから、さつきから揺れてるでヤンスよく！ギヤアア!!出たああああ!!」

「出たって、お化けが入ってるわけないだろ」

円堂は栗松に構わずロッカーに向かう。

「そこに居るのか、壁山」

円堂がロッカーを開けようとするすると反動で思いつきりドアが開き飛ばされた。中に居たのはやはり壁山だった。

「どうも、キャプテン……どうも。どうも……」

「壁山……」

呆れながら壁山の名を呟く松野と穴戸と半田。入野は倒れた円堂を引つ張り起こし上げた。

「お前何やってんだよ？早く出ろよ、試合始まつちやうだろ」

「そ、それが……抜けられないんすよ！助けて〜！」

壁山は勢い良くロツカーごと飛び跳ねる。

「じゃあ、いつそのことそのままサツカーやるでヤンスね。鉄壁の守り、なんちつて」

「お、上手いな」

「入野、上手くない」

「そんな〜！出して欲しいっす!!」

栗松と入野の冗談に半田がツツコミを入れる。壁山はどうにかして出ようと、必死に飛び跳ねる。怪我をしていないのが不思議な位だった。

「壁山、これ以上動くと怪我する。まずは落ち着け」

「キャプテン、俺やってみます」

「少林、頼むぞ！」

壁山達と同じく一年の少林寺歩は、数歩下がり勢い良く走り出した。そして飛び上が

りロツカーを蹴り飛ばした。その衝撃で壁山は何とか外に出る事が出来た。皆が驚いている中、入野は少林寺の蹴りに拍手を送った。

「すみませんキャプテン……俺、ちよつと怖くなっちゃって……」

「壁山、逃げたら何も始まらない。一度逃げたらずっと逃げ続けなきゃならなくなる。そんなの、カッコ悪いだろ？」

「キャプテン……すみません。俺、やるだけやってみるっス！」

「よし！その意気だ！」

入野は壁山に手を差し出す。壁山はその手を握り締め立ち上がる。

（流石俺の子孫だ。部員達の士気も充分。これなら良い試合が出来そうだ！）

「……で、私はベンチなのか」

グラウンドに戻ってきた後、入野は直ぐに帝国学園の元に向かい再び謝罪してきた。二度も謝罪してきた事に選手達は驚きの表情を隠せなかった。その後、いよいよ試合が始まろうとした時、誰がベンチに入るかと話になった。人数上誰かがベンチに下がらなければならぬのは分かっていたが、自分がベンチに下がるとは思わず不満が隠しきれていない。

「お任せ下さい！女の子の出番が無い事を証明してみせましょう!!」

目金がかうも自信満々に言うので、仕方無く引き下がることにした。既にグラウンドに着いている円堂は申し訳なきそうに入野の方を見ていた。

(……今回は子孫の顔に免じて許しておこう)

「あの……」

隣からふと声を掛けられたので横を向くと、部員勧誘の時に出会った新聞部の生徒が隣に座っていた。

「私、新聞部の音無春奈です！どうぞよろしく」

「嗚呼、宜しく」

「取材、よろしいですか？」

「良いぞ」

「では、今回の試合、勝つ自信はありますか？」

「ん？無いな」

「えっ!？」

入野の即答過ぎる答えに思わずズッコケる春奈。入野は続ける。

「……だがな、彼奴等は何かやってくれそうな気がしてな。根拠など無いのだが。だから私はその何かに賭けようと思う。その何かが、勝利に導いてくれるんじゃないかって、期待している」

「……カッコイイ〜！今のコメント、是非使わせて貰いますね!!」

「えっ?」

入野は春奈の言葉に思わず驚く。さらに隣を見ると秋が少し照れた表情をしていた。入野と同じくコメントが新聞に載るのだろう。そしていよいよホイッスルが鳴る。

(愈々試合が始まる……子孫、俺はお前の秘めた可能性に賭けている。お前なら、どんなどんでん返しをしてくれるのだろうか)



## 御先祖様は体を張る

試合が始まって十分が経過した。入野達は、目の前の惨状に目を覆いたくなくなった。最初は雷門中が優勢に思えたが、それは呆気なく崩れてしまった。あつという間に帝国学園のペースに飲まれ、次々と点を入れられてしまった。

(パワーもスピードも……迄とは……何故最初に気付かなかったのだ俺は！最初に気付けば、対策は練れた筈だ!!)

雷門中サッカー部にファウルギリギリのシュートを撃ち次々と点を決めていく。もう既に全員が満身創痍だった。

(そして……鬼道有人という男。何故彼奴は俺達と試合を？そして何故あの時豪炎寺を見ていた？彼奴の目的は一体なんだ?)

豪炎寺はあの時のキックを見る限り、相当の手練だと分かる。その豪炎寺が雷門中に転校した時に帝国学園からの練習試合の申し込み。怪しいと入野は考え込む。

(……まさか！彼奴等の目的は豪炎寺か!?!ならば一体何の為に俺達と試合を？訳が分からん！兎も角、今は子孫達が心配だ。後半戦に備えておこう)

入野はこつそりとベンチを抜け出し、ウォーミングアップに向かった。入野がウオー

ミングアップを終え戻ってきた頃には、丁度前半戦を終えた所だった。円堂達は入野が居ない内に随分とボロボロになってしまった。点数は10対0。寧ろ10点で済んで良かったと思えるレベルである。

「みんな……」

「喋る元氣すらないみたい……」

誰一人として立ち上がれない円堂達を、秋と春奈は心配そうに見つめていた。

「どうなってるんだあいつら!? 誰一人息が乱れてないぜ!？」

「そりゃそうだよ。奴ら走って無いからね」

「僕らずっと遊ばれてるって感じでもん……」

帝国学園は、自分達のエリアからシユートを撃っており、雷門エリアに向かった者は少ない。それを皆はひしと実感させられたのである。

「クソっ! このまま終わってたまるか! 後半はあいつらを走らせて体力を消耗させるんだ!!」

「消耗って……もう無理でヤンスよ……」

「ああ……もう俺走れない……」

「なんだなんだ!?! まだ前半が終わったばかりじゃないか!!」

「後半もやるんスかあ? もうやるまでもないっスよ……」

「やっぱりこの試合、無茶にも程があつたんですよ……」

穴戸や栗松、壁山の言葉に同意する部員も少なくない。円堂は怒りに震えながら立ち上がった。

「何言ってる!?!まだやるぞ!勝利の女神がどちらに微笑むかなんて最後までやってみなくちゃ分かんないだろ!?!そうだろう!?!なあ皆!!」

円堂が問い掛けるも、誰も返事を返さなかつた。ただ一人を除いて。

「その通りだな」

「入野!?!」

入野の発言に全員が驚く。入野の目には、円堂と同じ様に闘志が燃え盛っていた。

「後半は私が入る。多少は負担が減るだろう」

「何言ってるんだ入野!?!あいつらのサッカー見てただろ!?!相手はボールを使って攻撃してくるんだぜ!?!」

「だから、何だ」

「えっ……」

「痛いのも全部承知の上だ。私が、満身創痍の部員を見て放っておく様な人間だとも思ってたか」

「そ、それは……」

「それに……」

半田が入野に詰め寄るも、入野は淡々と返す。そして宍戸の前まで歩き左足首に触れた。宍戸は痛みで小さく悲鳴を上げた。

「宍戸、怪我をしていたのだろう？後半もこの怪我で出るなら、彼奴等にとっては恰好の餌だ」

「本当かなのか、宍戸!？」

「すみませんキャプテン……言い出せなくて」

秋が怪我を診た所、酷くはないが無理はしない方が良いと言った。

「なら、代わりに私が宍戸のポジションに入る。さあ、彼奴等を見返しに行くぞ」

『さて！いよいよ後半戦のスタートです!!雷門は八番宍戸に変わり雷門中サッカー部の紅一点、十九番入野が入ります!!圧倒的な帝国学園の力にどう立ち向かっていくのか』

!!  
』

ナレーションの実況を聞き流しながら、入野はグラウンドに立つ。

「入野……」

「半田……さつきは済まなかった」

「いや、俺こそ強く言い過ぎちゃったからな……あいつらには気を付けろよ」

「分かっている。お互い、無茶はしないようにな」

「もう無茶な気もするけど」

「それもそうか」

軽く談笑した入野は心を切り替えて帝国学園のエリアを真っ直ぐ見据える。そして、後半戦のホイッスルが鳴った。

「いくぞ……デスゾーン開始」

帝国学園からのキックオフで始まり、帝国学園の選手が雷門エリアへと上がって行く。

「そして、奴を引き摺りだせ!!」

「デスゾーン!!」

(……奴?やはり狙いは豪炎寺!!俺達は囷だったのか!!)

気付いた入野は直ぐに円堂の元に向かう。これ以上自分達が傷付けば、彼等の思い通

りになってしまふ。それだけは腹ただしかつたので阻止したかつた。

「円堂!!」

入野が向かうも虚しく、放たれたシュートは真つ直ぐゴールへと向かい反応が遅れた。円堂はゴールに叩き付けられた。

「しつかりしろ、円堂!!」

「続ける、奴を炙り出すまで」

その後も次々とラフプレーに近い攻撃で雷門中サッカー部が倒れていく。入野は必死に攻撃をカットしてシュートを撃つも、簡単に止められてしまふ。どんどん点数が積み重なっていき、遂に18点目を入れられてしまった。

「出て来い……出て来い。さもなければ、あの二人を……叩きのめす!!」

鬼道が指し示したのは円堂と入野。選手達は交代で入野と円堂にボールをぶつけていく。入野はどうにかしてボールを奪うも直ぐに必殺技・サイクロンで吹き飛ばされてしまった。

「ふざけるな……!こんな……!こんな……!こんな、サッカーじゃねえ!!」

「風丸!?!」

地面に倒れ伏せていた風丸が立ち上がり、円堂を押し退けた。ボールは風丸の顔面に直撃し、風丸は遂に倒れてしまった。

「風丸!!風丸!!」

入野や円堂が傍に寄った時には、もうボロボロだった。風丸はぼそりと呟いた。

「えん、どう……いり、の……」

「……お前の気持ち、受け止めたぜ。入野、ポジションに戻ってくれ」

「……分かった。信じている」

入野はそう言い残し、ポジションに着く。

（俺はあの目を知っている。嘗ての俺と同じ、何事にも決して諦めないあの眼差し。今の彼奴になら、きつと……）

「絶対に……このゴールは守ってみせる!!」

「フツ。一度として守れてはいないが」

「百裂シヨット!!」

再びシュートが放たれた。次まともに喰らえば、円堂は立つ事も出来ないだろう。部員の誰もが円堂を守ろうと立ち上がる。ただ一人、入野だけは帝国学園エリアへと走り始めた。その行動に雷門中サッカー部だけでなく、帝国学園サッカー部も驚いていた。『なんと入野!!円堂をフォローせず、一人帝国ゴールへと走っていく!!これは一体どういう事だ!』

「入野は……俺を信じて走ってるんだ!俺がシュートを止めるって!!これを止めた俺か

ら、パスが来ると信じて!!うおおお!!はあっ!!」

円堂が拳を握ると、周りにオーラが見えてきた。練習の時には見られなかったオーラが。円堂のオーラは拳に集まり、大きく光る手を空中に出した。そしてそれを前に突き出し、百裂ショットを受け止めた。その姿に、その場にいた全員が驚いた。

(遂に……遂にやったぞ!!子孫が、ゴットハンドを完成させた!!)

あの鉄塔広場で練習していたゴットハンド。一度も出現させる事が出来なかったが、ここで遂に出現させる事に成功した。

「いつけええええ!!入野!!」

円堂が投げたボールを素早く受け取り、帝国ゴールへと向かってドリブルする。

「通させるものか!!」

「それはどうだ!!」

「何?」

帝国側の選手が立ち塞がるも、入野はあつという間に抜いてしまった。次々と帝国学園サッカー部をかわし、DFが止めようとするも入野は高く上に飛び上がり見事に抜けた。切った。

(これで大体、連中の癖は読み切った!!まさか前世で培った人を観る力がこうも役に立つとはな!!後はキーパーのみだ!!)



キーパーは直ぐに構えに入った。しかし入野は臆する事なくシュートの構えに入る。(子孫は体を張ってまで俺にボールを渡した!ならば今度は俺が体を張る番だ!!このゴール、外すわけにはいかん!!)

入野は再び高く飛び上がり、体を回転させる。鉄塔広場で感じた力をボールに集中させ、勢い良く叩き付けた。

「うおおおおおおお!!」

叩き付けられた様に蹴られたボールはバチバチと火花を纏い、やがて電気となつて一直線にゴールに向かった。ボールはキーパーストレスレの所を飛びゴールに入った。そしてホイッスルが鳴った。

『ゴオーーーール!! ついに! 雷門イレブンが帝国学園から一点をもぎ取りましたああああ!!』

一斉にあちこちから歓声が響く。入野は目の前の出来事に実感が湧かない中、歓声を浴びながら着地しようとした。

「うぐっ!?!」

右足に鈍痛が走った。着地の際に、足をくじいてしまった様だ。入野は怪我を悟られない様に立ち上がる。ここでバレてしまえば相手側の恰好の餌食になる。ホイッスルが鳴り試合が始まった。ポジションに戻り、ふと後ろを振り返ったその瞬間、ガンツと

頭に強い衝撃が走った。一瞬何が起きたのか分からなかったが、衝撃で体が回転し、後の景色が見えた。目線の先には白黒のボールの先にシユートを撃ったと思わしき選手が居た。

(後ろから……撃たれたか……し、そん……)

目の前が真っ暗になってしまった。その様子を、豪炎寺とは正反対の茂みに居た、一人の男子生徒が心配そうに見つめていた。

## 御先祖様は再会する

「……………んう……………あ？こ、ここは……………？」

「明ちゃん！大丈夫？！しっかりして！！先生！入野さんが目を覚ましました！！」

目を開けてみると、視界に入ってきたのは保健室の天井だった。入野は辺りを見回す。自分はどうかやらあの後運ばれて来たらしい。

「入野さん、大丈夫？起きれる？」

「はい……………何とか。秋……………その……………試合は？」

「それは後で話すから」

保健室の先生に診て貰い、松江に迎えに来て貰うことになった。先生は電話して来ると言い部屋を出て行った。秋と入野の二人が残った。

「実は、あの後ね……………」

入野が保健室に運ばれた後、試合は再開した様だった。その後もラフプレーに近い攻撃で再び攻撃されてきた時、目金がユニフォームを脱いで逃走してしまっただけで、しかし直後、豪炎寺がグラウンドに入りユニフォームを着、試合に参加すると言った。これにて雷門中サッカー部の士気も上がり、豪炎寺が見事にゴールを決め、円堂も再び

シユートを止める事に成功した。その後、帝国学園側が試合を棄権し実質雷門中サツカー部が勝利した形となった。その話を聞いた入野は内心ホツとしたような複雑な表情を浮かべた。

「……そうだったのか」

「うん。皆、この二点が始まりだって、凄い喜んでたよ！」

「それなら良かった」

(……狙いは豪炎寺だったのか……勝ったといえば勝ったのだが、どうも釈然とせんな)

「……どうかしたの？」

「否、何でもない……濟まないな。迷惑かけてしまつて」

「ううん、全然だよ！それに……明ちゃんが居てくれたから、あの一点が取れたんだし」

「あれはまぐれだ」

「でもあの時、思ったでしょ？ 円堂君なら止めてくれるって」

「嗚呼、あの目は絶対に止めると思つてな」

「あの時の二人、とつてもカツコよかつたよ！」

「有難う……円堂達は？」

「今、明ちゃんの荷物取りに行つてる所。多分もうすぐ戻ってくるんじゃないかな」

秋が言い終わると同時にガラリとドアが開き、円堂達が入ってきた。そして入野を

見つけると一目散に駆け寄った。

「入野！頭大丈夫か!？」

「その言葉だと私が頭が可笑しいとでも言いたいのか？まあ、頭痛も無いし体中が擦り傷塗れな事以外は特に異常はない」

「その喋りだと、もう大丈夫そうだな」

「良かったっス!!」

「入野！聞いてくれ!!俺達」

「勝ったんだろう？本当に良かったな」

円堂が肩をガシリと掴みぶんぶん振り回す。傷は痛むが、入野はその手を払おうとはしなかった。

（まあ良いか。子孫の笑顔が見られただけでも充分だ。）

入野は微笑み、円堂の手にそつと手を置いた。

「あの……松江さん。学校……」

「駄目です」

「そこをなんとか……」

「駄目なものは駄目です!!明さんは昨日頭を撃つたではありませんか!大事を取って今日はお休みです!!」

「昨日学校に私を迎えに来て素つ頓狂な悲鳴を上げながら病院に行きましたよね?病院の先生もこの子は人一倍丈夫そうだから平気って言ってたでしょう?」

「もしもの事を考えて言っているのです!私は奥様と旦那様から、明さんをよろしくと頼まれているのです!怪我をさせてしまったなど、私家政婦失格です!!」

「それは、私が油断したから……」

「油断も何もありません!!とにかく、もう学校には連絡を入れておきましたので!ほら、早くお部屋にお戻りください!!そしてゆっくり休む事!良いですね!」

「は、はい……」

次の日の朝、入野が学校へ行こうとすると松江が全力で阻止してきた。いくらでも言いくるめる事も出来るが、既に学校に連絡を入れられてしまっただけでも出来るはず、結局休む事にした。素振りも今日は禁止されてしまい部屋に居ても退屈なので、リ

ピングで録画していた時代劇を見る事にした。

(子孫達は今頃学校に行っているのだろうな……嗚呼……暇だ。水戸黄門は面白いが、  
どうも身体を動かしていないと、気が乗らない……)

普段は品行方正で通っている入野だったが、今日ばかりは、ぐうたらな一日を送っていた。お昼を食べ終え松江とまた時代劇を見ていた夕方、入野は時代劇に夢中になっている松江の代わりに、郵便物のチェックをしようとして外に出た。ポストを開けてみると一枚の封筒が入っていた。拾ってみると、裏に円堂様とだけ書かれていた。一瞬、心臓が掴まれる思いがした。入野以外、前世の事を知っている人間はいない筈だと思っていたからだ。

(……えん、どう。此処に円堂と書いて送ってきたという事は、俺が前世からの生まれ変わりだという事を知っている人間。一体誰だ!?)

緊張した面持ちで封筒を開けてみると、中から一枚の手紙が出て来た。シンプルな紙面に達筆な文字で短く書かれていた。

『初めてお会いした場所で、お待ちしております。今も貴方だけをお慕い申し上げます』

(はじ、めて……まさか!)

「明さん?どうかなさったのですか?早く水戸黄門の続きを見たいのですが……」

「少し出掛けてきます！夕飯迄には戻りますので!!」

「明さん!?今日は外出禁止だとあれほど!」

「お説教は後で沢山受けますから!!」

松江に止められる前に、靴を履き玄関を飛び出し住宅地を全速力で駆け抜けた。そして、円堂達と特訓していた鉄塔広場に辿り着いた。誰一人も居ない広場、真っ赤に燃える夕陽。入野は先日の試合の疲れからか、ベンチに座り込んでしまった。

「あの時も、疲れて御座りになられてましたよね?」

不意に凜とした声が聴こえてきた。聞き覚えのある懐かしい声に入野はバツと後ろを振り返る。

「……………会いとうございました。今は、明様とお呼びすれば宜しいのでしょうか?」

「……………お前は!」

そこに立っていたのは、同じ雷門中の制服を着ていた男子生徒だった。線の細い、幽玄な雰囲気を持ち、美少年と言っても足りない程の美人だった。入野は目を見開き、次第に涙が零れ落ちてきた。

「……………今世では出野四季と呼ばれております」

「お前か!本当にお前なのか!?!」

「はい。前世で貴方と死に別れ、ようやくお会いする事が出来ました……………」



出野が言い切る前に、入野は出野を抱き締める。彼もまた、前世の記憶を保持していた。前世では、入野の婚約者であったとある女性だった。入野を病で亡くし、どうしてもあの人の傍で生きたいという執念が叶い、現代へと転生する事が出来たのだった。

「お前には……迷惑を掛けてしまったな」

「とんでも御座いませぬ！お義父様もお義母様も本当に良くして下さいました。息子もすすくと立派に育ちました」

「……有難う……また、俺と共に生きてはくれぬか？今度は病に負けぬ様、強く生きていこう」

「はい！勿論で御座います!!」

出野も泣きながら入野を抱き締め返した。暫く抱き合つた二人は泣きやもうととりあえずベンチに座る事にした。

「これからお前はどうか？」

「私も明様と共にサッカー部に入ろうかと思えます」

「そうか。因みに運動の方は？」

「……御覽の通り、この様な貧弱な身ですのでマネージャーが精一杯です。ですが、これでも男の身ですので力仕事はお任せ下さい」

「マネージャーか。よし、秋達に掛け合ってみよう。男手が必要だとぼやいていたから

な」

「それは良かったです……彼はどうでしたか？」

「子孫の事か？流石俺の子孫だと言った所だ。試合、お前も見えていただろう？」

「ええ勿論。明様が倒れた時はヒヤヒヤしました。今すぐ駆け寄りたかったのですが、貴方とは今世では一度もお会いしていませんでしたので」

「そうだったのか……要らぬ心配を掛けたな」

「無茶をする所は前世も今世も変わっておられない様ですね。そして、あの子も……」

「安心しろ。彼奴にはなるべく無茶はさせない。俺が居るのだからな」

「その本人が無茶をしては意味がありませんよ？」

「うっ……」

凶星をつかれた入野は、バツが悪そうに顔を背ける。出野は、クスクスと微笑した。そして一瞬寂しそうな表情を見せた。

「……こうして再び会えた事はまるで奇跡のようですね」

「今回ばかりは神様仏様に感謝せねばな……つと、これ以上長く話し続けていれば松江に怒られる。今日はもう帰ろう。実は今日は外出禁止令を出されていてな……」

「それは大変！急いで帰りましょうか！」

階段を早足で降りた二人は並んで夕暮れの住宅地を進んでいった。家に帰った入野

が、松江からの説教コース（一時間）をみっちり喰らったのは別の話である。

## 御先祖様は考える

次の日ようやく学校に行けるようになった入野は直ぐに学校に向かった。そして円堂達から心配されながらも授業を受け、放課後になると別のクラスの出野を連れ部室へと向かった。部室に入ると、円堂達がホワイトボードを囲んでいた。

「入野、そいつは？」

「マネージャー志望の出野だ」

「出野四季です。よろしく」

「あ、出野もサッカー部に入るのか。マネージャー志望なら木野が喜ぶだろうな。人手が増えたって」

同じクラスの半田が出野の肩を組む。そして入野に問い掛ける。

「そういや、出野といつ知り合ったんだ？」

「実は、入野さんのプレイを見てたら、もつと近くで見たいなって思ってた。それなら、マネージャーが一番だと思って朝思い切って話してみたんだ」

「へえー、そんな事があったんだな」

「そういう事だ。で、何を話していたんだ？」

「帝国学園との試合で俺達の問題点が分かったんだ」

「問題点も何も、体力が無さすぎるって事」

松野の言葉に入野以外の部員には凶星だったのか、ズーンと雰囲気暗くなってしまう。

「……松野、落ち込ませないでくれ」

「あ、ごめん。今のでヘコんだ？」

悪びれる様子もなく松野は謝る。気を取り直した円堂はホワイトボードに向き直った。

「体力作りはもちろんんだけど、フォーメーションも考えたんだ」

円堂はホワイトボードにあるコート図の名前を書き込んでいく。そして円堂が書き終えると、それぞれポジションを確認すべく全員がボードを凝視した。

「えー!? 僕試合に出られないのー!？」

「逃げた奴が何言ってるんだか」

「戦略的撤退と言ってるだけだね」

目金は不服そうに反論すると、一年組は呆れた様な目を向けた。入野も呆れたように見ていたが、無視して再びボードを見る。

「で、円堂。私のポジションなんだが……」

「入野さん!? 無視ですか!？」

目金は入野の方を指差すが、入野はそれも無視して話を続けようとする。

「当たり前だろ。お前、入野に女だからって言ったこと謝ってないだろ? 入野はお前と違って体張ってまで点を取ってくれてんだからな」

半田の言葉に目金はうっと言葉を詰まらせた。少しして、おずおずと入野の横に立ち、頭を下げてきた。

「ごめんなさい」

「もう私は気にしてはいない。だが、もう女子を馬鹿にする発言は辞めておく事だな」

入野は目金の肩をポンと叩くと、円堂の方に顔を向けた。

「話の続きだ。私が何で……えつと……」

「FW、だろ。しっかりしろよ副キャプテン」

「そうそう……ん? 副キャプテン? 私がか!？」

「あれ? 言ってなかったっけ?」

染岡の言葉をそのまま飲み込もうとした瞬間、副キャプテンという単語に疑問を覚え円堂に詰め寄る。円堂は数歩後ろに下がりがながら、答えた。

「昨日入野休んでただろ? その間に決めたんだ。お前以外に任せられる奴は居ないって。皆賛成したんだ。FWなもの、入野が特にこだわりが無いって言ってたから……」

「……その時ポジションが全く分からなかったからどれでも良いと言つてた筈なんだが」

「あれ？ そうだったっけ？」

「……まあ皆がそれで良いのなら、喜んで引き受けよう」

円堂と入野が話していると、宍戸が恐る恐る手を挙げた。

「あゝキャプテン……」

「どうかしたのか？」

「この間の豪炎寺さん、呼べないんですかね」

豪炎寺の名が出た瞬間、染岡の表情が険しくなった。それに便乗して壁山と目金も彼を呼ぶべきだと話し出すと、堪忍袋の緒が切れたのか染岡はコメカミに青筋を立てながら立ち上がった。

「あんなの邪道だ……俺が本当のサッカーを見せてやる！」

「そ、染岡？」

半田が驚いた顔で染岡を呼ぶ。しかし染岡は聞こえないのか、口々に話し始めた。

「豪炎寺はもうやらないんだろ!？」

「それは……分らないけど」

「円堂もあいつに頼り過ぎだ！」

「そんな事は……」

「染岡、落ち着け」

「入野も黙ってるよ！俺達だって出来るさ！もつと俺達を信じろよ！」

（染岡の気持ちも分からなくはないが……）

すると部室のドアが開き、秋が入ってきた。秋は部室の暗鈍な雰囲気気が付いた。

「何かあったの？」

「え、あ、何でもない」

円堂がその場を取り繕うように秋に説明する。秋は察したのかその事にはそれ以上触れる事は無かった。秋はお客さんが来たと部室に招き入れた。

「あ、夏美」

「え!？」

理事長代理である夏美を呼び捨てにした入野を部員達は驚いて目を向く。夏美は、入野に微笑んだが直ぐに顔を顰め鼻を摘んだ。

「臭いわ……」

「運動部の部室はこんなものだ」

「こんな奴何で連れてきたんだよ！」

「話があるって言うから……」



「落ち着け染岡。まずは話を聞くぞ」

先ほどの件で苛々していた染岡は舌打ちを打つ。入野は染岡をこれ以上怒らせないように宥める。夏美は染岡の態度にもお構いなしで部室に入る。

「帝国学園との練習試合、なんとか廃部は免れたようね」

「おう！これからガンガン試合していくからな！」

「そう、なら次の対戦相手を決めてあげたわ」

夏美の言葉に円堂と入野は喜び、他の部員達は驚いていた。帝国学園と試合して直ぐに他の学校と試合出来るとは思わなかったからだ。

「スゴいでヤンスね!!もう次の試合が決まるなんて!!」

「やったな、円堂！」

「ああ、夢みたいだよ！また試合が出来るなんて!!」

円堂たちが喜んでワイワイ騒いでいると、先程から喋ろうにも喋れない夏美が少し口調をキツくして話を続けようとする。

「話を聞くの、聞かないの？」

「ああ、すまない。で、どこの学校なんだ？」

「尾刈斗中よ……試合は一週間後」

尾刈斗中という聞き慣れない学校名に円堂達は首を傾げる。

「勿論、ただで試合をやれば良い訳では無いわ」

「今度負けたらこのサッカー部は直ちに廃部」

「またか……」

逃れられたと思ったがまた直面した廃部の件に風丸は苦笑いをする。

「ただし、勝利すればフットボールフロンティアへの参加を認めましょう」

フットボールフロンティアの言葉に部員全員が驚いた様に夏美を見る。

「せいぜい頑張る事ね」

そう言い残して夏美は部室を後にした。

「フットボールフロンティア……これに出られるのか」

「すごいですね!! 中学サッカー日本一を決める大会ですよ!!」

「オー! 俺、盛り上がって来たでヤンスよ!!」

「私が入った当初はそんな事夢物語か何かだと思っていたが……」

「部員七人の頃じゃ考えられなかったもんな」

「考える所か勧誘すらしてなかったし、それにグラウンドが使えないって言って練習サボってたもんね」

秋の一言に後から入って来た組以外がバツが悪そうに冷や汗をかきながら目を逸らした。染岡は半ば慌てて話を逸らす。

「喜ぶのはまだ早い。俺達は今度の試合に勝たないと出られないんだからな」

「分かってるさ！皆、この一戦絶対に負けられないぞ！さあ、練習やろうぜ！！」

「オー！」

「うおりやああああああ！！」

尾刈斗中戦に向けて練習を始めた雷門中サッカー部。しかし、入野は頭を抱えていた。原因は先程から暴走している染岡だった。松野に危険なスライディングをするわ影野の服を掴んでボールを奪う。明らかにフールと言われても仕方の無いプレーだった。半田の諫める声も無視し、挙句の果てには風丸の肩を押しシュートする。しかしボールはゴールに入らず弾き返された。染岡は大量の汗をかきながら膝をつく。

「どうしたんだよ染岡」

「こんなんじや駄目だ！」

「染岡さん、ちよつとラフプレー過ぎますよ！」

「そんなことねえよ！」

円堂や穴戸の言葉にも乱暴に返す。入野は頭を抱え溜息を吐いた。秋と心配そうに様子を見ていた出野が入野の方に近付いてきた。

「明様……その……」

「嗚呼、分かっている」

入野は再び溜息を吐くと、染岡の方に向かい染岡の前にしゃがみ込んだ。そして額にそつと指を近づけた。バチツと音が鳴った。いきなりの痛みに染岡はびっくりし、数歩下がった。

「何すんだよ!？」

「何って、デコピン」

「……て、てめえ!!何しやがる!!」

最初は何が何だか分からなかった染岡だが、段々状況が掴めてきたのか怒りに震えながら入野の胸倉を掴んだ。いかにも殴りそうな様子で円堂達が助けに入ろうとするも、入野はそれを制止した。

「目は覚めたか」

「はあ!？」

「何がそんなことねえよだ!!お前のやっている事は危険な行為だという事が分からんのか!!お前がもし相手を怪我させてしまったら、お前は どうする気だ!?!怪我をさせてしまった相手の分の気持ちも背負ってサッカーが出来るのか!?!」

染岡は入野の剣幕に呆気にとられてしまい思わず手を離す。入野はユニフォームを簡単に整え、染岡に向き直る。

「お前の焦る気持ちは充分に分かる。だがな、これ以上危険な行為をするのなら、降りた方がよい。今のお前では、誰にも勝てやしない。なあ染岡、お前の目指すサッカーは本当にこんなものなのか?」

入野の言葉に染岡は息を飲み顔を背ける。そして暫くして絞り出すような声で呟いた。

「すまない……」

「私も悪かったな。言い過ぎた」

入野は染岡の頭に手を置くとクシャクシャと撫で、そして優しく微笑んだ。秋から一旦休憩しようとなり、円堂達はベンチに集まった。ベンチには帝国戦の時、秋と一緒に観戦していた春奈が居た。何でも、怖い噂があるというらしい。

「尾刈斗中の怖い噂ってなんだよ」

円堂が春奈に声をかける。春奈は手帳を開きながら話し始めた。

「えっと、噂って言うのは……まず、尾刈斗中と試合した学校の選手は、三日後に全員高熱で倒れてしまったとか」

「高熱？」

「尾刈斗中の中に風邪でも引いてる奴がいたんじや無いのか？」

「とりあえず真面目に聞いてろ」

入野が呆れた顔で円堂と半田を睨む。先ほどの件もあつてか、ビクリと肩を震わせた。春奈は話を続ける。

「他にも、尾刈斗中が試合に負けそうになるとスゴい風が吹いて結局中止になるとか。

尾刈斗中のゴールにシュートを入れようとすると足が動かなくなるとかですね」

「ト、トイレ行つてくるっス……」

青ざめた顔をして壁山はその場を離れていつてしまった。

「呪いか……」

影野の一言に何人かが壁山程ではないが、顔が青ざめていた。入野は特に興味も無さそうに聴いていた。

「こ、怖くないんでヤンスか……？」

「呪い？そんなのあるわけが無い。迷信だ迷信」

栗松が聞いてくるも、入野はあつけらかんと答える。それもその筈、入野は前世の記憶を持っている。お化けや呪いなんて、そんなものがあるのなら、自分達が何故現代を生きているのかが分かるはずだ。ふと、出野と目が合う。出野も同じ考えの様で苦笑いをしていた。

「ホントなんですかね、キャプテン」

「噂だよ、噂」

円堂も同じく信じてはいないようだった。しかし、すっかり春奈の持ってきた話にビビってしまった一年組はまた彼の名を口に出す。

「やっぱり……豪炎寺さん……」

「そうでヤンスね……」

栗松と少林寺の話が耳に入った染岡は案の定反応し、二人を怒鳴った。

「なんだお前ら?! 豪炎寺なんか頼らなくても俺や入野がシユートを決めてやる! FWは俺達で充分だ!!」

「染岡、痛い」

染岡は入野の横に立ち背中を叩く。結構力が入っていたのか、痛がった入野は染岡を睨む。染岡はバツが悪そうに手を引つ込める。

「豪炎寺豪炎寺ってそりゃ染岡も怒るよな」

「それに、元から居るメンバーで頑張るってのも良いと思うけどね」

半田や松野が苦笑しながら言う。その言葉に何人かが賛同する。しかし、宍戸はまた声を上げた。

「でもキャプテン。もし豪炎寺さんが来てくれなかつたら、キャプテンや入野さんが頑張ってくれたとはいえ、俺達廃部だったんですよ?」

「今度だつて……なあ……」

「うん……」

「キャプテンも、負けられない試合だつて言つてたじゃないですか。尾刈斗中……なんか怖そうだし……やっぱり」

心配が止まらない宍戸と栗松と少林寺。円堂は皆に言葉をかける。

「みんな、人に頼つてたら強くなれないぞ」

「そうだ!」

染岡も同意して声を上げる。根本的な所は違うのだが、入野は何も言わなかつた。秋達が心配そうに見つめていた。



練習を終えた入野は出野と共に帰り道を歩いていた。先程から入野の溜息が止まらない。

「明様……」

「大丈夫だ。心配掛けてすまなかつた」

「いえいえ、とんでもありません。大変なのですね……サッカーというのは」

「少し怒りすぎたかな？だが、あーでも言わなければきつと気付かないだろうし……一年も一年で、豪炎寺に頼り過ぎなのも問題なんだがな」

「私からは何も言える事はありません。ただ、無理はなさない様に。明様が倒れてしまつては皆さんも心配されると思います」

「ありがとう……それにしても、良く彼奴等の前と俺の前で切り替えが出来るな」

「性格ですか？そうですね……楽しいからです、この現代が」

「そうか……お前が楽しんでるのならそれで良い」

「明様も楽しまなければいけませんよ？では私はこちらで……」

「嗚呼、また明日」

入野は出野と別れ再び一人で歩き出した。暫く歩き、曲がり角を曲がった瞬間、素早いスピードで引き返そうとした。しかしそれより早く、誰かが猛スピードで突っ込んできた。

「あーっ！つ！！雷門中サッカー部の女子部員だーっ！！」

叫んできた誰かはそのまま入野の腰あたりに抱き着く。強い衝撃を受けた入野は倒れそうになりながらも何とか耐えきった。腰辺りに視線を下ろすと、見覚えのある顔があつた。

「俺のこと、覚えてますか？」

「……確か、帝国学園サッカー部の一人でしたね」

「はい！帝国学園一年の成神健也って言います！」

「御丁寧な挨拶ありがとうございます……」

未だに先程のダメージが癒えない入野は、やんわりと身体をぶんぶん振る成神を引き剥がそうとする。すると向こうから何人かが走り寄ってきた。入野はその声にも見覚えがあつた。

「おい！何やってんだ成神！」

その内の一人が成神を引き剥がす。ホツとした入野は引き剥がしてくれた人物に礼を言おうと顔を見るとお互いにあつと声を出した。その人物は、帝国戦の時に入野に

ボールを思いつきりぶつけた張本人だった。お互いに無言な状態が続く。

「成神？佐久間？どうしたんだ？」

「あつ……」

「あつ」

そして曲り角からもう一人出て来た。そしてその人物も入野を見た途端、ピシリと固まってしまった。

「離して下さいっスよー。佐久間先輩」

「お前が勝手に走るからだろうが!!」

ガヤガヤと騒ぐ二人を見た人物はハッと立ち直り、入野に声を掛ける。

「……久しぶりだな。すまないな、仲間が迷惑を掛けて」

「あ、はい、大丈夫です」

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は源田幸次郎、GKだ」

「入野明、です」

「ああ良く知ってる。お前ぐらいなもんだよ。俺達のところに堂々と来る奴なんて」

すると源田は笑いながら手を差し伸べてきた。入野はその意味を察して手を力強く握り返した。

「あの時のシユートは中々だった。次は止めてみせる」

「御手柔らかかに頼む」

「あ、入野せんばーい!!」

「成神!!」

再び腰辺りに衝撃が走った。今度は何となく予想はしていた為、しつかり足を踏ん張っていたので何とか耐え切った。案の定、成神が入野に

「俺、先輩のファンになっちゃったんスよ! だつてあんなカッコイイシユート撃つてくるとは思わなかったつスよ!!」

「成神、一旦離れてやってくれ」

成神は渋々と入野から離れる。しかし、成神からの羨望の目線は止まない。すると、先程から成神と言いつ争っていた佐久間と呼ばれた少年がこちらを気まずそうに見ていた。

「……どうも、初めまして?と言った方が良いかな? 名を教えるはくれないか?」

「佐久間次郎だ……お前、俺の事恨んでないのか」

入野は佐久間の顔を真っ直ぐ見ながら手を差し出す。佐久間はその手を取らず、入野の顔を驚いた様に見える。入野は直ぐに察し、アハハと笑い出した。

「あの時か!! 別に気にしてなどいない。サッカーに怪我は付き物だろう? 医者からもあなたは頑丈が取り柄だけだと言われたくらいだ! お前が気に病む事は無い!」

「……すまなかった。あの時、お前が足をくじいていたのは分かっていた。まさか、あんな事になるとは……」

「嗚呼……怪我を隠していたつもりだったが、バレていたか。結構上手く隠してはいたんだがな」

「入野……」

「気に病む事は無いと言っただろ？ さあ、この話は終わりだ。これからは友人として仲良くしてくれるか？」

「……ああ。よろしくな」

佐久間はようやく入野の手を握った。強ばっていた表情が和らいだ気がした。

(こうして見ると、普通の子どものだな……こやつらも)

「あ、そうだ！ 入野先輩、携帯持ってますか？ メアド交換しましょう！」

「メアド？ どうやって分かるんだ？」

「……入野。お前、普段どうやって携帯使ってるんだよ」

「……全部人任せです」

「機械音痴か」

「人が気にしてる事を!!」

源田達から携帯の使い方を教わりながら成神や源田、佐久間とのメアドを交換し、入

野は彼等と別れまた帰り道を進んで行く。

「あら、御機嫌が良いですね。明さん」  
「友人が出来たんです。昨日の敵は今日の友、でしたかね」

## 御先祖様は知る

次の日、学校は休みだったが午前中が部活だった入野は部活を終え松江から頼まれていたお使いを済ませ商店街をぶらついていた。暫く歩いていると、前の方に見覚えのある人物が居た。入野はその人物の方へと声を掛けた。

「田堂！・秋！」

「あれ？明ちゃん！」

「入野か！一緒に帰ろうぜ」

買い出しの帰りだった二人と合流した。そして三人はフットボールフロンティアや尾刈斗中の試合など他愛のない話をしながら歩いていった。

「これに勝つたらフットボールフロンティアに出場出来るな！」

「田堂君、ずっと前からフットボールフロンティアに出るのが夢だったもんね」

「ほう、そうだったのか」

「ああ、でさ……」

「どうかしたの？」

「あれ、豪炎寺じゃないか？」

円堂が指した先には私服姿の豪炎寺が前を歩いていった。こんな所で会うのは珍しいと思っていると、円堂が少し早歩きで歩き始めた。

「追うぞ」

「おい、円堂！」

「どうしよう……」

「止まれと言つて止まる奴ではないからな……着いてくか」

「うん」

入野と秋は円堂のストップパーとして豪炎寺の後を着いていく事にした。しばらく尾行を続けていると、豪炎寺はとある建物に入った。横には『稻妻総合病院』の看板があった。

「病院……?」

なんでこんな所にと不思議そうな顔をしていたが、我に返ると中に入ってしまった。

「行つちやつた……」

「……入るか」

秋と入野は円堂の後を追いかけて中に入る。制止しても無駄なのは、二人が良く分かっている。なので何も言わず着いていく事にした。少し歩いていたがすっかり豪炎寺を見失ってしまった。円堂は周りを見渡しながら豪炎寺を探す。



(そのまま見つからずに大人しく帰ってくれるなら良いんだがなあ……)

「……明ちゃん、あれ……」

暫く歩いていた秋がふと見つけたプレートを指差す。入野はそれを見て、あつと声を漏らした。それに気付かない円堂はどんどん進もうとする。

「こつちかな……」

「円堂、それ以上は！」

入野が慌てて引き留めようとしたが、目の前の病室のドアが開き、中から豪炎寺が出て来た。

「お前ら……!?!」

「え、いや、その……」

円堂がしどろもどろに答えようとすると、視界の端にベットに眠る少女が居た。豪炎寺は少女を隠そうとドアを閉め円堂達を睨む。

「何しに来た」

「えつと……豪炎寺がここに入るのを見たから怪我か病気かなって……サッカーを辞めた切っ掛けもそれなのかなーって思ってた……」

ある意味正直に話す円堂を見て、溜息を吐き気まずそうに豪炎寺に視線を向ける。

「お前があの一度だけってのは分かってる！俺も、誘いに来たわけじゃないんだ。なん

か、俺心配でさ……悪いとは思ったんだけど……その……ごめん!!」

勢い良く頭を下げた円堂と、少し目を丸くした豪炎寺。入野と秋も円堂の隣に立つ。

「ごめんなさい……悪いって分かってはいたけど……」

「私も円堂達と同じだ……すまなかった」

二人も同じ様に頭を下げる。豪炎寺は何も言わなかった。不思議に思った円堂が顔を上げると病室横のプレートには、秋達が見つけた『豪炎寺夕香』の文字が入っていた。

「入院してるのって……」

「妹だ……全く、お前らには呆れるよ。入野も木野も、もういいから顔を上げろ」

二人が恐る恐る顔を上げると、豪炎寺は病室のドアを開きそのまま立つ。

「入れよ」

「え、あ、ああ」

「お邪魔します」

「失礼します」

病室に入った円堂達が見たのは、幾つものコードに繋がれていた五、六歳の少女が眠っていた。生きてはいるが、まるで死んでいる様に眠っていた。

「夕香って言うんだ。もうずっと眠り続けている」

「えっ?」

「話すよ、そうでもしなきゃお前ら帰らないだろう?」

「で、でも。豪炎寺君が話したくないなら……」

「構わない。二人も聞いてつてくれ」

そして豪炎寺は重たい口を開く様にポツリと話し始めた。豪炎寺の妹、夕香は去年のフットボールフロンティアの大会で兄が出場する決勝を見る為に会場へと向かったがその途中、事故に遭いそれ以降眠り続けている様だった。

「……事故の事を聞いたのは、試合の直前だった」

「だからお前は……」

「……病院に向かったよ。この病院には親父が勤めているんだ。俺が転校したのもその都合……」

豪炎寺は静かに椅子に座った。その表情はただただ悲しそうだった。豪炎寺は続ける。

「俺がサッカーをやらなきゃ、夕香はこんな事にはならなかった……!夕香がこんなに苦しんでいるのに、俺がのうのうとサッカーをしている訳にはいかない。だから俺は……!」

豪炎寺は苦しそうにズボンの裾を掴んだ。

「あの時……どうして体が動いたのか……自分でも分からないんだ……自然に、体が動

いて……」

その時の豪炎寺の表情はどこか切なげで寂しそうだった。

「……辛い話させちゃったな。俺、何も知らずに誘って……ごめん」

円堂は改めて豪炎寺に謝るのも、豪炎寺は何も答えなかった。円堂達はその場を後にしようとした。

「この事は、誰にも言わない。じゃあ……」

「私もだ。では、失礼致します」

「……サッカー部はどうなった？」

「次の対戦校が決まったんだ。豪炎寺のシユートが切っ掛けで皆、練習頑張ってるんだ」

「ありがとう。豪炎寺君」

「有難う」

「ああ……」

円堂達はそのまま病室を立ち去った。病院を出た三人は何も言わず歩き出したが、円堂がポツリと口を開いた。

「……豪炎寺がサッカーを辞めた理由は、妹の為だったんだな」

「そうだな。だが、彼奴は本当にそれで良いのだろうか？」

「えっ？」

「例えば、だ。円堂、もし私の失敗が原因でお前が眠ってしまったとしよう。そして私がそれに責任を感じサッカーを辞めたとしよう。そしてお前が起きた時、どう思うか？」

「そりゃあ、辞めてほしくないって思うよ。入野の事を責めようとは思わないし、入野とはもつとサッカーやりたいし……」

「きつと、豪炎寺の妹もそう思うだろう。だが、それに気付く為には豪炎寺自身がそれに気付かなければならない。私達が言つても、今の彼奴には届かない」

「そう……だね」

三人の表情は晴れることなく、帰路についた。

次の日の放課後、昼休みに染岡から練習に付き合つてほしいと頼まれた入野は、円堂達よりも一足先に河川敷で染岡の練習を見ていた。染岡は一心不乱にシュートを撃ち続けている。そのどれもがゴールに入らなかった。

(良い線はいつているんだがな……惜しいな)

「染岡、一旦休憩しよう」

「ああ……」

入野は染岡と共に土手に座り、持っていた水筒を渡す。

「コントロールはあれだが、パワーは充分ある。もう少しじゃないのか?」

「……決められなきやダメなんだよ」

染岡の表情はどこか思い詰めたような表情だった。入野は心配そうに染岡を見つめる。染岡は重たい口を開く。

「……木野が言ってた通り、帝国との試合が決まるまで俺は練習をサボっていた。グラウンドが借りれないだとか、部員が足りないのを理由にして逃げていた」

入野は何も言わずに染岡の言葉に耳を傾けていた。染岡は自嘲する様に続ける。

「正直、自業自得だよな……今までのツケが今になって帰ってきた。取り戻そうにも、こんな調子じゃあな」

「……染岡、お前の目標は何だ?」

「何だよ急に……豪炎寺みてえなシユートを撃てるようになる事だ」

「それは無理だな」

「はっ」

まさかの即答に思わず口が開く。入野は気にせず話す。

「染岡は染岡なんだろう？ だったのなら、自分のシユートを撃つのが普通じゃないか？ 誰かを目標にしたとしても、誰かになれる訳じゃない。染岡は豪炎寺にはなれない。染岡なら、そこは豪炎寺には出来ない自分だけのプレーをする。自分なりのプレーを作り上げるじゃ、ダメなのか？」

「自分なりの……？」

「そうだ。それにサッカーは十一人でやるものだ。支えてくれる仲間は一人二人ではない」

染岡は暫く考え込んでいたが、突然立ち上がった。

「そうだな！ 俺は自分なりのサッカーをやってやる!!」

「その意気だ。もうフラインプレーはするなよ」

「おう!! ってそれを言うならワンマンプレーじゃねえのか？」

「あつ」

染岡の元気が戻った所で練習を再開させた。入野がパスしたボールを染岡が撃つ。しかし中々入らない。センスは良いのだが、ゴールに入らない。

「染岡、自分が撃ちたいシユートを想像して撃ったらどうだ？ 闇雲に撃つのは良くない」  
「分かった」

染岡がイライラしそうになると入野がアドバイスをする。それを何回か繰り返して  
いると、後ろから円堂達がやってきた。

「染岡、入野。頑張ってるな」

「円堂……フツ……上手くいかねえよ。イケそうなのにゴールに入らない。これじゃあ  
ストライカー失格だな」

入野は円堂と交代し、風丸と先頭に立ち走り込みを始めた。二人の掛け声にあわせて  
部員達も着いてくる。円堂と染岡は先程の入野と同じ様に土手に座り話していた。暫  
くしてから、染岡が思いつきり立ち上がったのを見て入野はもう大丈夫だろうと確信し  
た。そして円堂と染岡が加わり練習が始まった。この前の様なピリピリとした雰囲気  
は無くなり、染岡の表情にも笑顔が見えるようになった。暫くしてから休憩の時間にな  
った。円堂と出野が辺りをキョロキョロしているのに気が付いた入野は二人に近づ  
く。

「どうかしたのか」

「実は、入野さんに会いたって人が……」

「今日からマネージャーが増えたから紹介しようと思って……」

二人が同時に話し出した瞬間、身体に衝撃が走った。いきなりの事で何も分からずに  
入野はその場に倒れる。何かと身体を起こしながら首辺りに抱き着いている人物を



見ようとする。

「な……………え……………」

「入野明先輩ですな!? 私、新聞部の音無春奈って言います!! 今日からサッカー部のマネージャーを務めさせて頂きます!!」

「あ、どうも……………宜しく……………」

ゆつくりと立ち上がった入野に春奈はキラキラした瞳でドリンクを渡してきた。入野はおずおずとそれを受け取る。

（何だろう……………前にもこんな事合ったことが……………というより先程から四季の視線が若干痛い）

「私、帝国学園との試合で雷門中サッカー部のファンになっちゃって! 特に入野先輩の!!」

「あ、有難う……………えっと、音無さん?」

「嫌だなあく水臭いですよ!! 春奈って呼んで下さいね!!」

「分かった……………宜しくな、春奈」

「先輩の事も明先輩って呼んで良いですか!？」

「別に構わないが……………」

「やったー!!」

(どうしよう、四季からの視線が痛い。痛過ぎる。頼む落ち着いてくれ、これは浮気では無い、断じて)

再び春奈は入野に抱き着く。入野は抱き着かれた事よりも出野の殺気を含んだかのような視線が気になってしょうがなかった。表面上何でも無いように取り繕っていたが、内心冷や汗が止まらなかった。それを知らない部員達は春奈のテンションに苦笑していた。

「やっぱり音無じゃなくてやかまashedだ」

誰かがボソツと呟いた。その日の帰り道に出野に無言無表情で詰め寄られたのはまた別の話である。

あれから尾刈斗中との試合に向けて練習を続けていく。染岡のシユートは日に日に威力が上がっていた。もう普通のシユートとは思えない程である。

「よーし！良いぞ染岡ー！もう一回やってみようぜ！！」  
「おう！！」

染岡も随分元気になっている様で、入野は微笑ましかった。本人は内心修羅場の真っ只中ではあるが。何度目かに送られてきたパスを染岡に繋ぐ。円堂達や入野自身も随分と成長していた。染岡は受け取ったボールをそのまま撃つ。しかし、それはいつもと違っていた。ボールは青いドラゴンを纏い、唸り声を挙げながらゴールへと一直線に向かう。円堂が対応出来ずに驚いていると、ボールはそのままゴールに入っていた。その様子に全員が呆気にとられた。

「スッゲー……………」

「今までのシュートとまるで違う……………」

「ドラゴンがガーツて吠えたような……………」

「僕もそんな感じがしました……………」

栗松と風丸が驚き、半田が手をドラゴンで表現し少林寺もそれに同意する。自分でも実感が湧かないのか、言葉を発さない染岡に円堂が駆け寄る。

「染岡！すっげえシュートだったな！！」

「これが……………俺のシュートだ！！」

「良くやった、染岡！！」

「痛え!？」

入野も染岡に駆け寄り、嬉しさのあまり染岡の背中をバンと叩く。ここ最近、染岡の事を一番気にかけていたのは入野だった。染岡が遂にシユートを完成させたのが嬉しかったのか、思わず力が入ってしまった。染岡は顔を顰めたが、直ぐに笑って頭をグリと撫でる。

「ありがとうな、入野」

「嗚呼！」

「よし!このシユートに名前を付けようぜ！」

「賛成!!」

円堂の提案に部員達が次々と案を出してくる。微笑ましい光景に頬が緩む。

「頬が緩んでいますよ、明様」

「そういうお前もだ」

「子孫達がこうして居られるのを見るのも、奇跡なんでしょうね」

「奇跡……前世では信用していなかったが、今回ばかりは、信じるしかないか」

出野とココソコ話していると、ふと穴戸が入野の方を向いた。

「そういえば、入野さんのシユート名前まだ決めていませんよね」

「そういえばそうだったな」

「じゃあ入野のシユートも決めるか！入野はどんなのが良いんだ？」

「私か？うーん……思い付かん。目金、何か良いのはあるか？」

入野に急に話を振られた目金がびっくりしてこちらを向いた。

「僕ですかあ!？」

「こういうのを決めるのは苦手だ。頼む」

「そうですねえ……入野さんって横文字とか似合わなさそうですし……天に響く雷鳴と書いて『響天雷鳴』なんてどうでしょう？」

『響天雷鳴』……うん、良い。流石だな、目金」

「えへへ、そうですね？」

「入野、あんまり褒めるな。こいつは褒めると調子に乗るタイプだ」

「酷いですよ染岡君!!」

アハハと談笑していると、向こうから足音が聞こえてきた。振り返ると、そこに立っていたのは豪炎寺だった。豪炎寺の姿に一年組は喜び、染岡は敵意を見せた。豪炎寺は何も言わず円堂の前に来る。

「円堂……俺、やるよ」

豪炎寺の瞳には強い意志が見えた。その言葉に喜びの声が上がった。視線を感じた入野が橋の方を向くと、そこには夏未が車に乗ろうとした所が見えた。

「……………有難う。夏未」

夏未が何かしてくれたのだと感じた入野は小さな声でお礼を呟いた。

## 御先祖様は心配する

染岡のシユートが完成した数日後、サッカー部の部室で円堂と入野は豪炎寺の入部届けを確認していた。その隣に帝国学園との試合と同じ様に10番のユニフォームを着た豪炎寺が立っていた。

「これで豪炎寺は雷門中サッカー部の一員だな」

「これからも宜しくな。そうだ、改めて自己紹介して貰おうか」

「豪炎寺修也だ」

豪炎寺がサッカー部に入部した事で、一年組はとても喜んでいた。

「豪炎寺さんが俺達と一緒に……」

「これで怖いものナシだね！」

穴戸と少林寺が喜んでいると、壁に寄り掛かっていた染岡が豪炎寺に突つかかってくる。  
た。

「待てよ、そいつに何の用がある。雷門中には俺と入野の必殺技があるじゃねえか」

「落ち着け、染岡」

「染岡……」

「どうしたんだよ染岡。ストライカーが三人になるんだぜ？こんなに心強い事はないだろう？」

半田や入野の制止も、円堂の説得にも耳を貸さない染岡はそのまま豪炎寺に詰め寄る。

「ストライカーは俺と入野で充分だ」

「……結構つまらないことにこだわるんだな」

「つまらないことだとお!？」

「豪炎寺!!染岡!!」

入野が止めに入る前に、豪炎寺の言葉に怒りを覚えた染岡は胸倉を掴む。一触即発かと思った時に、部室のドアが開いた。

「皆、いる?」

「見て欲しいものがあるんですけど……」

「何かあった?」

出野達マネージャーが入って来たので、染岡は舌打ちをして豪炎寺を離す。

「豪炎寺、大丈夫か?」

「大したことはない」

春奈は持ってきたDVDをプレイヤーに入れて再生させた。そこにはサッカーの試



合が映されていた。

「これは？」

「尾刈斗中の試合です」

「こんなのどこで……」

他校の試合など、そう簡単に手に入るものではない。風丸は不思議そうに尋ねる。

「新聞部の情報網を使ってゲットしたんですよ！私に掛かればこんなのお茶の子さいさいですよ？」

「ほー……流石だな」

「キヤー！！明先輩に褒められちゃいました〜！」

入野が素直に感心していると、春奈が抱き着いてきた。もうこの光景が日常茶飯事になっており誰も気に留めていない。そして最近になってようやく出野からの殺気が止んできた様だった。豪炎寺だけが初めて見るので少し驚いていた。

「いつもあなのか？」

「暫くしてたら慣れるよ……」

半田は苦笑しながら答えた。一方円堂は既にDVDの方に釘付けになっていた。感嘆の声を挙げながら見ていると、ふと違和感を覚えた。

「ん？これは？」

「なんであいつら止まってんの？」

映像には、尾刈斗中と試合していた選手達がその場から一步も動いていない様子が映っていた。その様子に円堂と松野が疑問を感じた。

「多分動けないんだと思います……噂では尾刈斗中の呪いだとか」

「呪い、か……」

円堂はジツと画面を見つめていた。入野が顔を覗き込む。

「円堂は信じていないようだな」

「え？だって呪いなんてあるわけないだろ？」

（此奴は案外リアリストだな……）

子孫の意外な一面に、入野は思わず感心していた。

そして試合当日になった。

『はい。いよいよ今日この日を迎えました。雷門中对尾刈斗中の練習試合。あの帝国学園を降した我が雷門中イレブンの勇姿を見ようと、多くの観客が詰めかけております。雷門中イレブンはどのような試合を見せてくれるのでしょうか？ 実況は私、将棋部の角馬圭太でお送りいたします！』

帝国学園との試合の時に実況をしていた角馬が今回も試合をするようだった。雷門中サッカー部は試合に向けてグラウンドでウォーミングアップを始めていた。入野も念入りにマッサージをしていると、視界の端に見覚えのある人物が四人見えた。時間も少し挨拶をしに行こうと入野はその場を離れた。グラウンドから少し離れた木の下に向かうと、その人物達は何かを話していた。入野はこっそりと近づき十分に近付いた所で声を掛ける。

「佐久間、源田、成神！」

「えっ?! あ、入野先輩!!」

「入野?!」

佐久間と源田、成神と鬼道が驚いた顔で入野の方を向いた。成神は入野に気が付いた瞬間駆け寄り抱き着く。佐久間と源田も親しそうに話しかける様子を見て鬼道は呆然としていた。

「どうしてここに来たんスカ!?」

「ウオーミングアップはもう終わったのか?」

「お前達が見えたから挨拶しようとな。有難う、見に来てくれて……否、偵察に来たと  
いった所か?」

「……まあな」

「佐久間、源田……こいつは……」

偵察と凶星をつかれた源田は気まずそうに頭を搔く。鬼道が不思議そうに見ていた  
ので、入野は成神に抱き着かれた鬼道の方を向く。

「確か、鬼道有人だったかな……」

「久しぶりだな……入野明と言ってたな」

「嗚呼、先日は私達と試合をしてくれて有難う」

「……お前、恨んでいないのか?」

鬼道がキョトンとした顔で尋ねてくる。あれだけボロボロにしても、普通に  
話し掛けてくる事に不思議に思っていたのだろう。入野は思わず吹き出して笑いなが  
ら話した。

「佐久間と同じ事を言うんだな!もう大丈夫だ。あれから皆、心機一転で頑張っている。  
おまえ達のお陰だよ。有難う」

入野は頭をペコリと下げる。鬼道は佐久間達の方を向く。

「佐久間、源田……何時から仲良くなっていた？」

「ああ……」

遂にその質問が来たかと佐久間は視線を逸らす。源田は別にバレても構わないと一つ溜息を吐いて出会った時の事を話し始めた。理由を聞いた鬼道は成程と納得した表情を見せた。

「だからか、成神が偵察に行きたいと駄々をこねたのは」

「まあ、そんな所だな……」

入野はグラウンドの方を見ると、円堂達はもうそろそろウォーミングアップを終える頃だった。入野は成神に視線を落とす。

「じゃあもうそろそろ戻らないと……」

「ええ……」

「成神、もういい加減離れろ」

佐久間が勢い良く成神を引き剥がす。成神はふくれっ面で入野から離れた。

「またな、是非ウチを応援してくれ」

「ハイ！先輩の活躍しつかりと見てますから!!」

入野は四人に手を振り、その場を後にした。

入野がグラウンドに戻つて来ると、全員が準備を終えていた。出野がキョロキョロと入野を探していた。

「出野！」

「あ、入野さん！良かった、もうすぐ相手の選手が来るつて」

「嗚呼分かった」

二人が話していると円堂が来たと呟いた。円堂達の方を振り向くと、如何にもなオーラを纏った選手がやってきた。

「あれが、尾刈斗中……」

「不気味だ……」

「お前が言うな」

影野の呟きに半田がツツコミを入れる。入野は聴き流しながら尾刈斗中の選手達を見ていた。見れば見る程、不気味さを感じる。不気味さを感じながらも、円堂達はセクターラインに並んだ。横では互いの監督が握手をしていた。その様子を見ていた入野

は尾刈斗中サッカー部の監督、地木流と目が合った。地木流は入野と豪炎寺の元に近付いてきた。

「君が入野さんと豪炎寺君ですね？帝国学園との試合で撃ったシュート、見させて頂きましたよ。いやはや、全くもって素晴らしい。今日はお手柔らかにお願いしますね？」

「ちよつと待て。あんた達の相手は入野と豪炎寺だけじゃない。俺達全員だ」

「はあ？」

感嘆の声を上げる地木流に染岡が詰め寄る。しかし地木流は呆れた表情していた。

「これは滑稽ですねえ。我々は入野さんと豪炎寺君と戦いたいから練習試合を申し込んだんですよ。弱小チームの雷門には興味がありません」

「何!？」

「やめろ染岡」

掴みかかろうとする染岡を円堂が制止する。流石に腹が立つた入野はフツと鼻を鳴らした。

「地木流監督、でしたね？此の度は私達雷門中サッカー部と試合して頂き誠に有難う御座います。また、先日の試合でのシュート、褒めて頂きこちらも嬉しく思います。ですが貴方は一つ勘違いをしていらつしやいます。サッカーは十一人でやるもの。私や豪炎寺にばかり目がいつていると、足元を掬われるかもしれませんね？」

腕を組みながら入野は言う。誰かがまるで某理事長代理だと呟いた。地木流は入野の言葉に面を食らったが、面白げに笑う。

「ご忠告ありがとうございますございます入野さん……精々お二方の足を引っ張らない様にして下さう」

地木流達尾刈斗中サッカー部はその場を後にした。染岡は今にも舌打ちをしそうな表情だった。円堂は染岡の肩に手を置いた。

「言ってくれるじゃねえか」

「見せてやろうぜ、染岡。お前の必殺シュートを！」

「おう！」

「……へ、へ、へつくしゅん!!」

入野が小さくくしやみをした。傍に居た風丸が心配そうに顔を覗き込んだ。

「入野、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ……今日は風があるから砂埃が酷くてな……それに天気も余り良くない。雷でも鳴りそうだ」

「雷? 怖いのか？」

「まさか……な」

「ああ……大丈夫だ。誰にも言わない」



「すまん……」

入野は前世の頃から雷が苦手だった。現在の天気も曇っていて天気は良くない。霧  
囲気も相まって雷でも落ちてきそうな予感がした。

(何も起こらなければ良いが……)

出野の方をそつと向く。出野も入野の雷嫌いを知っているのか、頑張れというジエス  
チャーを送ってきた。

## 御先祖様は空気を読めなかった

そしていよいよホイッスルが鳴り試合が始まった。尾刈斗中からのキックオフで始まり、入野もすぐに動こうとしたが、相手選手の三途にマークされ動く事が出来ない。豪炎寺も同じ様に動けないようだ。

（早速俺達にマークか……だが言っただはずだ。サッカーは十一人でやるものだ。俺達だけが相手では無い）

ボールは雷門エリアへと向かっていた。円堂はシュートを止める構えに入った。月村がゴール前に辿り着いた。

「来い！」

「喰らえ！フアントムシュート!!」

月村が撃ったシュートは幾つもの人魂に分かれゴールへと向かう。円堂はグツと拳を握り、前に突き出す。拳のオーラが巨大な手に変わりシュートを止めた。月村は止められた事に驚いていた。帝国学園との試合では土壇場と火事場の馬鹿力で出したゴットハンドだったが、特訓を重ね完全に自在に出せる様になった様だ。

「モノにしたんだな、円堂！」

「へへへ、まーな！」

そう言い円堂は風丸にボールを渡す。円堂がボールを止めた事で火がついたのか、皆落ちて着いてプレー出来るようになってきた。風丸がドリブルで上がっていく。風丸は少林寺にパスを送る。少林寺の近くには、未だにマークされ続ける入野と豪炎寺が居た。

「こつちだ、少林寺！」

ノーマークだった染岡の声に向かってパスを送る。パスを受け取った染岡はそのままゴールへと向かっていく。

「見せてやるぜ！俺の必殺シュート、ドラゴンクラッシュ!!」

染岡は完全に自分の物にしたドラゴンクラッシュを撃ち込んだ。尾刈斗中のゴールキーパー鉈は、染岡のボールに反応出来ず、ゴールを許してしまった。円堂と半田は染岡の元に行きハイタッチを交わした。スコアボードの雷門中の下に大きく1と数字が出て来た。その様子に入野もとても喜ばしく思った。そしてホイッスルが鳴り、試合が再開した。染岡のシュートで完全に雷門中サッカー部のペースに乗せられてた尾刈斗中は遂に二点目を許してしまった。

「やったやったー！」

「円堂、勝てるんじゃないか!？」

「ああ!!」

円堂や風丸、半田を中心に歓喜に沸く雷門中サッカー部。入野と豪炎寺だけが、訝げに尾刈斗中を見ていた。

「尾刈斗中は力を隠している……」

「嗚呼、あの時見た選手が動かなくなるとするのが気になるな……」

「何とかしてマークから外れるようにした方が良い」

「分かった、善処する」

そしてホイッスルが鳴った。武羅渡は幽谷にボールを渡した。そしてやけに気合が入っているかの様に見えた。

(愈々本気と云う訳か……ん?今のは……)

ふと嫌な予感がした入野は音がした方向を向いた。グラウンドから大分離れた方からピカリと稲妻が走った。そしてゴロゴロと音がした。

(か、か、雷いいいい!!)

周りの目も気にする事無く、入野は耳を塞ぎ目を瞑った。少し経ちもう大丈夫だろうと目を開いた。雷は止み、同じ曇り空が広がっていた。ふと周りを見渡すと、半田達の動きが止まっていた。嫌、動けなくなっていた様に見えた。

(まさか、例の……)

前に見た尾刈斗中の試合。そこで入野は相手選手の動きが止まっていた場面を思い出したが、今まさにその状況になっていたのだ。入野はハツとして雷門エリアへと向かっていく。それに気付いた尾刈斗中の選手が入野を食い止めようと立ち塞がった。

「ゴーストロックが効いていない!？」

「そこを退いて貰うぞ!!」

栗松と壁山を抜いてゴールへと向かう幽谷を追い掛ける。しかし距離は遠く、幽谷にシュートを打たれてしまった。円堂も壁山達同様、動けずにシュートを止める事が出来ずに一点を入れられてしまった。ホイッスルが鳴ると同時に円堂達が動けるようになり、何人かが地面に膝を付いた。入野は円堂達の元に駆け寄る。

『幽谷のシュート炸裂! 2対1、尾刈斗中点を返しました!』

「円堂、濟まない……間に合わなかった」

「大丈夫だ」

円堂は入野を宥めてから尾刈斗中の方を見る。先程のシュートに驚きを隠せない様だ。そして二人はそれぞれのポジションへと戻っていった。入野の傍に豪炎寺が駆け寄る。

「入野」

「豪炎寺か……あれは一体何だったんだ?」

「俺にも分からない。暫くは闇雲に向かうのは辞めた方が良い」

「そう、だな……染岡には私から言っておく。聞くかは分からんが」

「頼んだ」

今度は雷門中からのキックオフで始まった。センターサークルで豪炎寺はじつと尾刈斗中の方を見据えていた。

「あれは一体……」

「取られたなら……取り返せばいい!!」

点を取られた焦りからか、染岡は豪炎寺の肩を押しボールを奪った。豪炎寺の制止も聞かず、走り出した。豪炎寺は舌打ちを打ちながら、入野は染岡を制止しようと染岡を追いかける様に走り出した。染岡はどんどん抜いていき、遂にゴール手前に辿り着いた。シュート態勢に入る染岡を見た尾刈斗中ゴールキーパーの鉈はゆっくりと手で円を描くように回し始めた。やがてそれは紫の玉を中心とした不思議な空間となった。染岡は戸惑いながらも、ドラゴンクラッシュを撃つ。しかしボールは鉈の手にすっぽりと収まってしまった。

「バカな!?!」

「何だ、今のは……?」

染岡はドラゴンクラッシュを止められたこと、豪炎寺は鉈の技に驚いていた。

「これが歪む空間……どんなシユートもこの技には無力！」

『尾刈斗中、ボールを大きく返した！ボールは……前線の幽谷へ！これはカウンターアタックかー!?!』

鉈が高く上げたボールは前線の幽谷に渡った。円堂は全員に守備に戻る様に指示を出す。それを嘲笑うかのように幽谷は笑っていた。

「無駄だ。お前達は既に俺達の呪いに掛かっている。ゴースト……」

「呪い？お化け？そんな物ある訳が無い!!」

「なっ!?!」

隙を見た入野がスライディングで幽谷からボールを奪う。それに尾刈斗中が驚いた。入野は直ぐにドリブルで前線に上がっていく。すると入野の前に柳田と不亂拳が立ちはだかる。仕方無く近くにいた半田にパスを送ろうとするも、死角にいた靈幻にボールを奪われ再び幽谷に渡った。

「今度こそ、ゴーストロック!!」

「マールトマレ！」

「なっ!?!」

謎の呪文が聞こえた直後、入野の足がコンクリートで固められたかのように動けなくなってしまう。動こうと藻掻くもびくともしない。周りを見渡すと円堂達も再び動

けなくなった様だ。そして悠々とゴールを決められてしまった。

(これが、呪い?今の呪文の様なものは一体……)

「クソツ!!呪いだと!?!まやかしだ!!」

「そうかな?ゴーストロック!!」

「マールトマレ!」

試合が再開し、また謎の呪文が唱えられ再び雷門中サッカー部の足が動かなくなつた。先程入野にボールを取られたからか慎重に確認した幽谷は染岡からボールを奪いそのままゴールへと向かっていく。

(どうにかして、動かねば……あ、鼻が……)

「……は、は、ハックション!!おわあっ!?!」

今朝から砂埃の影響か、鼻の調子が可笑しかった入野は盛大にくしゃみをしてしまった。しかし、幸運にも足が動き思わず転んで仕舞いそうになった。何とか立ち直つた入野は、未だに足が動かない円堂の方を向く。

(この好機、逃す訳にはいかん!此処からではどう足掻いても間に合わん。せめて!!)

「円堂!!」

「入野!?!」

入野は大声で円堂の名を叫んだ。それとほぼ同時に幽谷がシュートを放つた。間一



髪で動ける様になった円堂は不思議に思いながらもボールに手を伸ばしたが、あと一歩及ばず一点を決められてしまった。

『尾刈斗中3点目！これで雷門中は逆転を許してしまいましたー！』  
実況の声と同時に前半終了のホイッスルが鳴り響いた。

ハーフタイムに入り、円堂達は部室で作戦を考えていた。しかし、前半の尾刈斗中の攻撃に何人かが怯えてしまっていた。

「クソツ、どうなっているんだ」

「急に足が動かなくなるなんて……」

「やっぱり、呪いなんじゃあ……」

風丸と半田は、顔を顰めてゴーストロックについて考えていた。それは他の部員達も同じですっかり呪いだと思いつけてしまっていた。

「皆、何びびってんだよ。まだ前半が終わったばかりじゃないか!」

「嫌ああ!!怖いっス怖いっス!!俺これ以上怖くて無理っス!!」

壁山が逃げ出そうとするのを宍戸と風丸が懸命に抑える。

「逃げるな壁山!!」

「呪いなんてあるわけないだろ!」

「だったら、どうして足が動かなくなっただんスか!」

「そ、それは……」

壁山の言葉に、宍戸も風丸も何も言い返せなかった。

「分からない……でも、絶対何か秘密がある筈だ」

円堂はブツブツと独り言の様に呟いていたが、ふと入野の方に顔を上げる。

「そういうえば、最初にゴーストロックを掛けられた時、入野だけ動けてたよな」

「あ、後三回目の時も最初は掛かったのに確か途中で動けてたよな」

円堂と半田の言葉に部員全員の視線が入野に集まる。入野はギクリとした。一回目は雷が怖くて耳を塞ぎ、三回目はくしゃみで動けるようになった。とてもではないが参考にはならないだろうと冷や汗をかく。

「そうですね、何で先輩は動けてたんですか?」

少林寺が入野に詰め寄る。ふと入野は呪文の事を思い出した。

「あの時何かが聞こえてきてた。一回目はそれで余りに不気味だったものだから思わず耳を塞いでな……三回目は、くしゃみをしたら何故か動ける様になったんだが……どう考えても参考にはならんと思うが」

「呪文……あつ」

「円堂、どうかしたのか？」

「あの監督が変な呪文を唱え始めてからだよな。尾刈斗中の動きが変わったのは」

「言われてみれば確かに……」

「じゃあ、あの呪文に秘密が？ 明ちゃんは耳を塞いでいたから動けたんだもの」

「春奈と秋が口々に言う。入野は自分の雷嫌いが役に立ったのか立たなかったのか分からなかった。」

「それに、あの時入野が俺の事を呼んでくれたから動けた……でも次動けるかは分からない」

「なんか入野先輩が何かをすると起きるでやんスね」

「栗松……辞めてくれ」

「タイミング的にはそうなのかもしれないが、理由が理由なのでこれ以上起きたらたまったものではない。」

「何か良い方法はないか……」

「雷……でも落ちれば……」

「雷？何だそれ？」

出野がボソリと呟いた言葉に半田が呆れた顔でツツコミを入れる。入野は雷という単語に反応し肩が揺れる。出野の方を向くも、当の本人は知らんぷりといった所だった。

（そういえばハーフタイムの時に春奈から飲み物を受け取ったが……まさかあれで怒っているのか？……後で謝らなければ）

「こうなったら試合中に答えを見つけられないな。とにかく、ボールを取ったらすぐにFWに回してシュートチャンスを増やすんだ。まだまだ一点差、必ず逆転しようぜ!! 頼んだぜ、豪炎寺、染岡、入野!」

「嗚呼、分かった」

「ああ、今度こそ決めてやるぜ!」

入野と染岡は返事を返したが豪炎寺だけは返事をせず、何かを考え込むように黙っていた。

後半を告げるホイッスルが鳴り響いた。雷門中サッカー部からのキックオフで始まった。染岡は豪炎寺にボールを渡す。しかし豪炎寺はそのボールを後ろにいた少林寺にパスを回した。その様子に雷門中サッカー部は驚く。

「何してるんだ!!」

「何でフアイアトルネードを撃たねえんだ!!」

「闇雲に撃つても勝てない……まだだ、まだ早いんだ」

円堂と染岡の言葉にも反応せず、豪炎寺はブツブツと何かを呟いていた。

(そうか、彼奴はあのゴールキーパーの技を見極めようと……それなら、俺もそれに乗るか)

豪炎寺の行動の意味を察した入野は豪炎寺の近くに走り寄る。しかし、まだ入野には尾刈斗中の選手がついている。下手に向かうのは危険だった。何とかしてマークから剥がれようとしている内に少林寺は、半田にパスを回した。そして半田はそのボールを入野と同じくマークされている染岡にパスを回してしまった。染岡はボールを取ろう

とするも、尾刈斗中の選手、屍にブロックされてしまった。ボールはそのままフィールドの外へと転がっていった。半田に少林寺と宍戸が詰め寄る。

「半田先輩！なんで豪炎寺先輩にパスしなかったんですか!!」

「豪炎寺先輩、ノーマークだったじゃないですか!!」

「だって、あいつにボールを回したってシュートしないだろ!?!入野はマークされているし!!」

三人が揉め合っている所に入野は近寄り、静かに諫める。

「喧嘩は試合の後で、だ」

入野の言葉に三人は口を噤んだ。入野は半田の方を向く。半田はバツが悪そうにそっぽを向いた。

「半田、マークされていた染岡にパスを回したのは良くなかった……私も、マークから外れる様に何とかやってみせる。だから、周りを良く見て欲しい」

「分かった……悪いな」

「お前ら、次は決める。黙って俺にパスを出せば良いんだ」

声を上げる染岡に何を思ったのか、一年達は顔を見合わせて頷いた。入野はとりあえずボールをキープし、相手の手の内が分かるまで動かない様にするべきだと伝えた。それが伝わっているかは分からなかった。

(年頃の子供は扱い方が分からん……俺がどうかしなければならぬが……)

溜息を吐きながらポジションに戻る。宍戸がスローインし、少林寺がボールを受け取った。そして、FW三人を見合わせた後、ボールを渡せという染岡の言葉を無視して豪炎寺にボールを渡してしまった。その行動に半田は眉を顰める。

「少林寺!!染岡にボールを渡せ!!」

「だって染岡さんのシュートじゃ止められてしまいます!」

「やっぱり豪炎寺さんか、入野さんじゃないと点は取れないでヤンス!!」

「お前ら……!」

栗松と少林寺の言葉に半田は叫び声を上げようとした。その行為を気に入らなかつたのは染岡当の本人であった。染岡が動き出そうとする前に入野が横に並ぶ。

「染岡、闇雲に撃つても駄目だ。まだ勝機はある筈。此処は一旦下がるべきだ!」

「うるせえ!!」

「なっ!?!」

「染岡!!」

入野の制止を振り切つて染岡は豪炎寺からボールを奪いそのまま尾刈斗中エリアへと向かつていく。その様子を尾刈斗中が嘲笑する様に見ていた。染岡は再びドラゴンクラッシュを撃つも、ゆがむ空間によつて簡単に止められてしまった。

「俺のドラゴンクラッシュユが……この程度だと……!?」

すっかり意気消沈してしまったのか、染岡はショックを受けたように膝から崩れ落ちて行く。

「それじゃあそろそろ……ジ・エンドにしてやろうか!! てめえら!! ゴーストロックだ!!」  
「おう!!」

「来るぞ!! 皆、下がれ!!」

円堂はゴーストロックに警戒して雷門中エリアに下がるように指示を出した。そしてまた例の呪文が聞こえてきた。

(このままだと、また動く事が出来なくなる……あれは一体……あれは?)

『あの監督が変な呪文を唱え始めてからだよな。尾刈斗中の動きが変わったのは』  
『雷……でも落ちれば……』

円堂と出野の言葉を思い出す。そして入野はゴーストロックの絡繰に気付き、円堂の方を向く。

「マールマールマレトマレ……生まれ!? そうか! そうだったのか!!」

「トドメだ!!」

「円堂、叫べえ!!」

「ゴロゴロドツカアーン!!」



入野が叫ぶとほぼ同時に、円堂の叫び声がグラウンド中に響き渡る。幽谷は気にせず  
にファントムシユートを撃つ。円堂は思いつきり足を動かし、ボールを拳で弾いた。そ  
の様子に尾刈斗中も雷門中も驚いた。

『止めました円堂ー！ー！！幽谷のファントムシユートを止めましたー！ー！！』

「円堂！！」

ボールを止めた円堂の元に入野達が駆け寄る。

「へへっ！見たか？俺の熱血パンチ！！」

「ああ！じゃなくて、どうして動けたんだ!?!」

「か、風丸さんも動けてるっス！」

「壁山、お前も動けてるでヤンス」

「えっ!?!」

自分達がいっつの間にか動けるようになった事をようやく理解した風丸達が驚いてい  
た。

「分かったんだよ！ゴーストロックの秘密が。コロコロ変わるフォーメーションでグル  
グルになった俺たちの頭に、あの監督が『止まれ』って暗示を擦り込む。……つまり俺  
たちは目と耳をゴワンゴワンにされていたんだよ」

「説明下手だなオイ！」

「つまりだな……視覚と聴覚に訴えた催眠術だったという事だ。ゴーストロックの正体は」

「催眠術？」

「あ、だからキャプテン『ゴロゴロドツカーン』って」

「あの呪文の正体は『生まれ』という暗示。円堂はそれを打ち消した。私は最初、その呪文を聴いていたから掛からなかった。三回目もくしゃみで大きな声が出てたまたま暗示が解けた……と言った所だ」

「じゃあ、呪いじゃなかったんすね!!」

入野の説明に壁山達がホツとした表情を浮かべた。豪炎寺が何かを確かめるような目線を送ってきた。入野は柔らかく微笑み頷いた。豪炎寺の表情が確信へと変わった。豪炎寺はゆがむ空間の正体に気付いたようだった。

「ヒヤハハハハ!! やつと気が付きやがったか!! だがもう遅いぜ!!」

「まだ終わっちゃいない、俺達の反撃はこれからだ! FWにボールを回すんだ!!」

地木流の余裕を持った声にも気にせず、円堂はボールを高く蹴り上げた。ボールを受け取った少林寺は心配そうに円堂を見つめる。

「でもキャプテン、染岡さんのシュートじゃ……」

「あいつを信じろ、少林!」

円堂は目を瞑り顔を俯ける。

「あの監督の言う通り、俺たちはまだまだ弱小チームだ。だから一人一人の力を合わせなくちゃ強くなれない。俺たちが守り……お前達が繋ぎ、あいつらが決める!!俺達の一点は、全員で取る一点なんだ!」

「俺達……全員……」

入野の脳裏には部員達の顔が浮かぶ。円堂もきつと同じく思っているのだろう。染岡の表情が先程より明るくなるのが見えた。

「支え合い、共に戦う。これがチームメイトの存在意義だ」

「さあ、行こうぜ!皆!!」

入野と円堂の言葉を合図に少林寺が駆け上がる。そして風丸の指示でMFが動き出す。後ろから追い掛けてくる尾刈斗中に気付いた少林寺は染岡にパスを送る。少林寺からのパスに染岡は驚いた表情を見せたが直ぐに気を取り直し、尾刈斗中のブロックを避けながらゴールへと駆け上がる。雷門中からのパスを受け取った時、染岡が一瞬嬉しそうな顔をしたのを入野は見逃さなかった。

「無駄無駄ア!!鉈がゴールを守る限り、俺達の勝利は確実だ!!」

地木流の言葉通り、ゴールには未だ鉈のゆがむ空間が発動している。あれを破らない限り、点を取る事は出来ない。染岡はゆがむ空間に目を細める。その横に勝利を確信し

た豪炎寺と入野が付く。

「奴の手を見るな!!あれも催眠術だ!!」

「なっ!?!」

「平衡感覚を失い、シュートが弱くなるぞ!!」

「お前、ずっとそれを探っていたのか……?」

染岡が悔しそうな顔で目を瞑る。入野はトンッと染岡の背中を叩く。そして指を上  
に指す。染岡は一瞬何の事か分からなかったが直ぐに察し上に飛び上がり、ドラゴンク  
ラッシュの態勢に入った。

「何度やっても無駄な事……」

鉈は余裕そうに眩く。染岡は勢い良くドラゴンクラッシュを放つ。しかし、ボールは  
空へと舞っていった。半田達は叫ぶが気にせずに入野はにやりと笑う。豪炎寺も飛び  
上がる。

「ファイアトルネード!」

青いドラゴンはファイアトルネードの炎を纏い、赤いドラゴンへと変化する。そして  
ボールはそのまま鉈ごとゴールに突き刺さった。

『豪炎寺の強烈シュートでキーパーごとゴール!!同点、雷門中、同点に追い付きまし  
たああ!!』

「良くやった!! 染岡!!」

「痛てえ!!」

「あ、すまん……」

入野は嬉しさの余り染岡の背中を思いつき叩く。染岡は顔を顰めながら、入野の背中を軽く叩き返す。地木流は目の前に起きた事が信じられず震えていた。しかし、まだ試合は終わっていない。幽谷はドリブルをするがそれを半田がカットし、そのボールを入野に回す。受け取ったボールを高く蹴り上げ入野も飛び上がる。

「響天雷鳴!!」

空中からのシュートなのでゆがむ空間は効かない。雷を纏ったシュートはそのままゴールへと突き刺さった。そして試合の終了を知らせるホイッスルが鳴る。

『ここで試合終了です! 4対3、4対3で雷門中の大逆転勝利だああ!!』

「ナイスパスだ、半田」

「ナイスシュートだったぜ、入野」

ふと入野は鬼道達が居た辺りを見渡す。彼等の姿はもう無かった。

夕日が差し掛かる頃、雷門中はグラウンドに集まっていた。皆、勝った事が信じられないのか、スコアボードを見て呆然としていた。円堂が染岡と豪炎寺の肩を叩く。

「やってくれたな染岡、豪炎寺。お前たちのドラゴントルネードが教えてくれたよ。一人じゃできないことも、二人で力を合わせればできるようになるんだってな」

「……エースストライカーの座は、譲った訳じゃねえからな」

「……フツ」

言葉はどうであれ、雰囲気が違う事を察した豪炎寺は微笑みを浮かべる。

「染岡、少しは素直になったらどうなんだ？」

「うるせえ」

入野が軽く染岡をからかうと染岡はそっぽを向いた。

「よし、皆！フットボールフロンティアに乗り込むぞ!!」

「おー!!」

皆は空に向かって拳を上げていた。入野も満面の笑みで拳を空に突き上げた。その

場に顧問である冬海がいない事に、誰も気づかなかつた。

## 御先祖様は試験を受ける

尾刈斗中との試合の次の日、入野は夏美に呼ばれ理事長室に来ていた。ソファに座って待っていると、夏未が入ってきた。

「あら、早かったわね」

「お疲れ様、毎日精が出るな」

「理事長代理として当然よ」

「それで、話というのは？」

「これを見て欲しいの」

夏未は入野の前のソファに座りお互いに向き合う。夏未は持っていた封筒を差し出した。入野はそれを受け取った。

「開けても良いか？」

「ええ、貴女にとつてとても大事なことだから」

「私にとつて……？」

不思議に思いながら、封筒を開ける。中から数枚の書類が出て来た。その一枚を取り出す。どうやら、フットボールフロンティアの規定事項の様だ。



「その書類のマーカーが引いてある所」

「……女子生徒は男子生徒との体格差、技術差等を考慮しサッカー協会が開催する試験に合格した生徒のみ参加可能。参加不可の生徒は女子フットボールフロンティアへの参加……は？」

「……まさかうちの学校が出るなんて思わなかったから、気になって調べたら、ね。しかも気付くのが遅くて、試験来週なのよ」

「……嘘だろ……」

入野は思わず絶句した。まさか大会に出るのに試験しなければならぬとは。改めて女子に転生した事を恨んでいると、夏末がもう一枚の紙を差し出した。

「此れは？」

「試験内容と日程。必要事項は此処に書かれているわ。申し込みは既に済ませてあるわ。試験と言っても実技だけだから、大丈夫だと思うけど」

「……ありがとう。夏末が調べてくれなかったら、出られない所だった。色々と迷惑を掛けたな。豪炎寺の件も」

「あら、私は何もしてないわよ。それに……」

「それに……？」

「……貴女のサッカーが見られなくなるのは嫌なのよ」

「……そうか。本当にありがとう」

「気にしないで頂戴。それより、彼等には伝えるの？」

「否、内緒にしておいて欲しい。彼奴等に心配は掛けたくない」

「分かったわ」

「なら、早速練習しなくてはな。じゃあ、また明日」

「ええ、頑張つてね」

夏末の激励の言葉を背に、入野はその場を後にした。

「参加資格?! そんな物が必要だったのですね……」

「まさかこんな事になるとはな」

学校が終わり、円堂達に断り先に学校を出た入野は自宅の裏庭にて出野と共に試験の

練習をしていた。裏庭なら円堂達に気付かれることなく練習が出来るからだった。

「きちんと読んでおけば……失念していた」

「試験は来週、でしたよね？」

「そうだ、うかうかしている暇はない。練習だ練習」

入野はボールを蹴りドリブルの練習を再開する。やるべき事は沢山ある。くよくよしている暇などはない。それを見ていた出野は昔を思い出しくすりと笑う。嘗ての入野も、今と同じ様に何かに集中する時、少しだけだが笑っているのだ。

「……何を笑っているんだ」

「ごめんなさい。昔を思い出していて……昔の明様も、集中している時、微かに笑ってらっしゃるので、つい」

「……これは俺の悪い癖だ」

「いえ、とても素敵な癖で御座いますよ？」

「……揶揄うな」

「私はそこに惚れたのですよ？」

「……嗚呼!!お前が居ると気が散る!!」

「なら、私は帰りましょうか？」

「……否、そこに居てくれ。居てくれるだけで良い」

「はい、分かりました」

入野は再び練習を再開させた。今度は出野も笑わずに入野をじっと見つめていた。前世では二人きりで過ごす時間は少なかつた。しかし今は、入野を苦しめた病も、二人の時間を割いた仕事も無い。今世になって初めての二人だけの時間だと言っても過言では無かつた。静かな時間が二人を包んだ。ボールの跳ねる音だけが辺りに響いた。

「……此処が試験会場、という所か」

いよいよ試験日を迎えた日、円堂には部活の休みの連絡を入れておいた。

(大分心配されてしまった……子孫に心配されるというのは慣れん……さて、時間も押している。急がねば)

目の前の建物に入る。どうやら建物の先にグラウンドが整備されているようだ。入野は入口の受付と書かれた紙が貼り付けてある机に向かつた。

「あの、こんにちは。試験を受けに来た入野明です」

「はい、今確認しますね……確認しました。ではこちらの方に名前を書いて頂いて、書き終わりましたらこの腕章を貰って、あちらにあるロッカールームで着替えて外のグラウンドに集合して下さい。腕章は左腕に付けておいて下さい」

「分かりました、有難う御座います」

受付の女性から説明を受けた入野は名前を記入し、腕章を受け取り案内されたロッカールームに入った。部屋には二、三人の生徒が着替えていた。

(一瞬吃驚してしまう……慣れないな、本当に)

挙動不審にならないよう平然を装い奥のロッカーで雷門中のユニフォームに着替え始めた。着替え終えた入野は腕章を取り付け外のグラウンドへと向かう。もう既に何人か外でストレッチを始めていた。皆、かなりの経験者の様だった。入野も彼女達に倣いウォーミングアップを始めた。暫くすると全員が集まったのか、試験監督らしき男がグラウンドに入ってきた。

「これより、フットボールフロンティア参加の試験を行います。皆さん、精一杯頑張ってくださいね」

「はいー」

女子の明るい返事に一瞬遅れたが、入野も元気良く返事をした。そして試験の説明が

始まった。

（試験員の選手からボールを奪い、ドリブルで躲してシュートを決める……成程、至極単純なルールだが……選手の実力がどれ位に拠るな）

そして試験の順番を決めるくじ引きが始まった。入野の順番は七番目、最後になる。試験を待つ間は、建物に入り最後のウォーミングアップをする事になっていた。

（様子見をしたかったが……残念だ）

「それでは一番の人から始めます」

入野達が建物に入ると、ホイッスルが鳴った。いよいよ試験は始まったのだ。入野は入念にストレッチを始めた。すると隣で同じくストレッチをしていた生徒からの視線を感じた。

「ねえねえ」

「え？あ、は、はい……」

「そのユニフォーム、雷門中のだよね？」

「はい、そうです」

「てことは、もしかして入野明って！」

「わ、私です」

「マジで!?噂って本当だったんだ!!」

「う、噂?？」

彼女の大きな声に他の生徒達の視線が入野に向けられる。彼女達は入野の顔を見るや驚いた表情で近付き、間髪入れずに入野に質問攻めを始めた。

「あれでしょ??めっちゃ弱いサッカー部に強い選手が二人も入ってきたって!」

「しかもあの帝国学園に勝ったとか!!」

「この前は尾刈斗中にも勝ったんでしょ!!」

「確か一人は豪炎寺、だったよね?」

「もう一人は全くの無名の選手で、しかも女子って聞いてたから会えるかなーって思ってたんだけど!マジで会えるとは思わなかった!!」

「しかも超カッコ良くてファンが多いんだって!!」

「あー、納得」

彼女達の質問攻めに先程から困惑してばかりの入野はどうか落ち着こうと彼女達に恐る恐る質問してみた。

「私の事、知ってるんですか……?」

「当たり前じゃん!!超有名なんだよ!!」

「ねえねえ!帝国学園から一点取ったってホント!？」

「え、あ、はい」

「あの帝国学園から一点取れるって凄いよ!!」

「皆さんも、フットボールフロンティアに出場するんですか……う?」

「敬語は無しでいいよ! そうそう! うちの学校、弱いし、ちよつと位は力になれたらいいなって」

「女子同士じゃやっぱ物足りないって感じだから、折角なら男子に混じって思いつきりやってみたいんだ」

「どうせ高校生位になったら力の差はハッキリしちゃうから、最後みたいなモンだし」

「そっか……」

「そーいや、明つて何でサッカー始めたの? 無名の選手がいきなり有名だなんて、滅多に無いよ」

「嗚呼……手助け、か? 私の友人がサッカー馬鹿でな。彼奴を見てみると、一緒にやってみたい、というか、そんな気分になって、気付いたら入部してた」

「ええ〜! 結構以外!! てことは初心者?」

「そう、だな」

その後も彼女達との会話は弾んでいき、何時の間にか残るは入野だけとなった。彼女達に見送られ、入野はグラウンドに出る。三人の女性が何やら話していた。入野の近くに試験監督が走り寄ってきた。



「入野明さん、だよね？」

「はい、宜しく御願ひ致します」

「やり方はさつき話していた通りに。時間は10分間」

「分かりました」

「では、位置について！」

指定されていた位置に立ち、相手の選手達をスッと見つめる。此処で負けてしまう訳にはいかない。

（子孫の為にも……仲間の為にも。此処で終わる訳にはいかない！）

試験開始のホイッスルが鳴り響いた。